

はじめに

AIの出現など、世の中の技術革新の進歩は目まぐるしく、将来を予測することが困難な時代が目の前に迫っています。このような、イノベーションや産業構造の変化は、私たち人間に働き方や考え方の変更を要請してきます。その一方、人として大切にしなければならぬ、変わらざるべき価値が存在します。このような中で、私たちはこれからどのように行動すべきか、生きるべきかをよく考え、的確に判断していくことが必要です。そのために必要な資質・能力を養うために、道徳教育はこれまで以上に重要な役割を果たすことが期待されます。

こうした中、平成二十七年三月に小学校及び中学校の学習指導要領等が改訂され、これまでの「道徳の時間」が新たに「特別の教科 道徳」と位置づけられることとなりました。

そこで、高知県教育委員会では、家庭や地域と連携、協力し、学校で行う道徳教育をより強化するために、『家庭で取り組む 高知の道徳』を改訂しました。

家庭は子どもの育つ基盤であり、豊かな心や人間性を育むうえで重要な役割を担っています。自分が人から大切にされ、価値ある存在であるという実感は、家族の温かい言葉から生まれます。そこから、自己肯定感や自信、そして「他の人ともよく生きていこう」、「世の中に役立つ人間になろう」とする姿勢も生まれてきます。

一方で、間違った行為に対しては、毅然とした態度で叱ることも必要です。大人が真剣に善悪の判断を示すことは、子どものよりよい成長を願う行為であり、子どもの人格を大切にすることにほかなりません。

月に一度は子どもと向き合い、夢や希望、悩みなどを語り合ってみましょう。本冊子を台所や居間など、すぐ手に取れるところに置いておき、語り合う時のきっかけとしてお役立てください。



高知家の子どもたちの「夢」や「志」の実現にむけて

家庭で取り組む

高知の道徳

はじめに

目次

この冊子の使い方

子どもの心のメモリアル

6

いかなことは いかな!

10

言葉から考えよう

12

『昔の人の言葉』から考えよう

『郷土の偉人の言葉』から考えよう

『ことわざ』から考えよう

『論語』から考えよう

家庭の力は心のエネルギー

16

子どもは社会の宝

18

地域ぐるみの道徳教育

20

高知県こども詩集『やまもも』 (第47集)

22

〔小学校 低学年〕 ・ へいてん

〔小学校 中学年〕 ・ 弟、けっこんする

〔小学校 高学年〕 ・ 久保家の仕事 ・ 真夏のお手伝い

〔中学校〕 ・ まほうのドーナツ

・ ちっちゃいころのお父さん



家庭版『心のノート』

24

A 自分自身に関すること

- ① 正しいことには勇気を出そう
 - ② 「自由」と「自分勝手」はちがう
 - ③ 自分をみがき、もっとかがやこう
- ### B 人との関わりに関すること

- ① あたたかい心をとどけよう
 - ② 「ありがとう」を伝えよう
 - ③ 時と場に応じた言葉づかいや態度
- ### C 集団や社会との関わりに関すること

- ① 社会のきまりやマナーを守って気持ちよくすごそう
 - ② 社会の役に立とう
 - ③ 大切な家族とのきずなを深めよう
 - ④ 我がふるさとを語ろう
- ### D 生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること
- ① いのちを大切にして精いっぱい生きよう
 - ② 自然とともに生きている

家族でつくろう！ 生活リズム

48

一人で悩まず相談を！

49

わたしたちの高知県を知ろう

50



郷土の偉人

52

板垣 退助（いたがき たいすけ）

岩崎 弥太郎（いわさき やたろう）

大江 卓（おおえ たく）

大原 富枝（おおはら とみえ）

窪添 慶吉（くぼぞえ けいきち）

見性院（けんしょういん）

坂本 龍馬（さかもと りょうま）

崎山 比佐衛（さきやま ひさえ）

佐竹 音次郎（さたけ おとじろう）

田内 千鶴子（たうち ちづこ）

武市 半平太（たけち はんぺいた）

寺田 寅彦（てらだ とらひこ）

中岡 慎太郎（なかおか しんたろう）

中浜 万次郎（なかはま まんじろう）

野中 兼山（のなか けんざん）

牧野 富太郎（まきの とみたろう）

森田 正馬（もりた まさたけ）

吉井 源太（よしい げんた）

126

124

118

114

110

108

104

100

96

90

84

78

76

70

66

62

58

54

この冊子の使い方

この冊子は、こんな場面で活用できます！

① 家庭で子どものかかわりを一層深めるときに

子どもとともに生活を振り返り、互いに自分自身を見つめ、生き方について考えたり、書き込みをしたり、話し合ったりしてみましょう。

② 子どもの成長を振り返ったり喜び合ったりするときに

子どもの成長過程における気付きや発見、喜びや驚き等を記録に残していくことで、子育てに役立ててみましょう。

③ 学級懇談や道徳参観日・講演会等の場で

子どもたちの道徳性にかかわって、保護者と教職員が話し合いの場をもつことで、共通理解を図りながら、子どもたちの豊かな心を育んでいきましょう。

④ 地域の集会等の場で

子どもは大人の鏡です。地域ぐるみで、健やかな子どもたちの成長を温かく見守っていきましょう。

子どもの心のメモリアル

★子どもの名前

★生年月日・身長・体重

年	月	日生
生まれたときの身長		cm
生まれたときの体重		g

★名前の由来

★子どもの成長への願い (こんな人になってほしい)

子どもの成長は家族みんなの喜びです。 **自分からすすんでできたことや、人のためにできたこと**など、子どもの成長を記録に残して子育てに役立てましょう。

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

年 月 日 歳

写真
や
シール

大人がきちんと教えよう!!

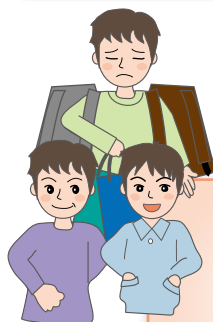
いかんことは **いかん!**

だれもが、自分の夢をかなえたいと願っています。

そのみんなの夢を大切にするためにも、してはならないことがあります。

してはならないこと（悪いこと）はしない。

このことを、大人がきちんと教えましょう!

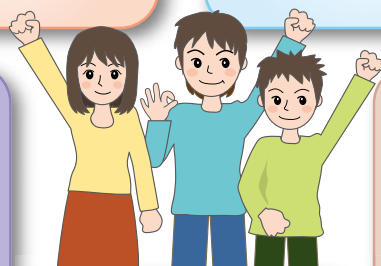


いじめは
いかん!

人の物を
とったら
いかん!

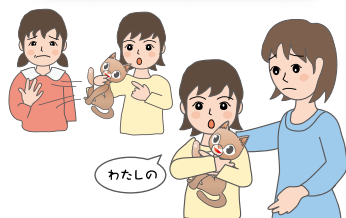


うそを
ついたら
いかん!



人に迷惑を
かけたら
いかん!

ひきょうな
ことをしたら
いかん!



どんな時代にも… 共通の規範(社会のルール)がありました。

ならぬことは ならぬものです!

「規範」…人間が行動したり判断したりするときに、従うべき判断のものさし

ひびのおしえ(抜粋)

ちちははをうやまい、
これをしたしみ、
そのころにしたがうべし

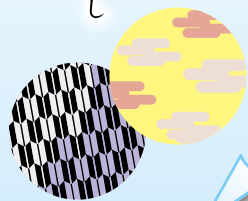
ひとをころすべからず

けものをむごくとりあつかい
むしけらをむえきにころすべからず

ぬすみすべからず

いつわるべからず
うそをついてひとのじやまをすべからず

福沢諭吉が、子息一太郎と捨次郎の兄弟のために
一日毎に書き与えた教訓集。



鷹は飢えても穂を摘まず

タカは、どんなに飢えていても稲の穂を食べる
ことがないように、品性が高く高潔な人物は、
たとえ生活に困っても不正なことには手を出さない、
というたとえ。

ならぬ堪忍 するが堪忍

我慢できないところをじっと我慢するのが、本当の
堪忍というもの。

什の掟(抜粋)

年長者の言うことに

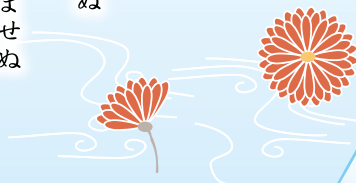
背いてはなりません

虚言をいう事はなりません

卑怯な振舞をしてはなりません

弱い者をいじめてはなりません

会津藩士としての心構えを定めたもので、毎日
子どもたちが最後に「ならぬことはならぬものです」
でしめくり誓っていた。
什とは「十人」を一単位とする組織のことです。



ことば かんが 言葉から考えよう

むかし ひと 「昔の人の言葉」から考えよう



よしだ しょういん

吉田 松陰

こころざし そろ

いす

ゆ

がく

「志^{こころざし}莊^{そう}ならば安^{やす}くんぞ往^ゆくとして学^{がく}を
成^なすべからざらんや」

写真=松陰神社提供

言葉=松陰神社吉田松陰語録より引用



しぶさわ えいいち

渋沢 栄一

ちようしょ

はっき

どりよく

「長^{ちようしょ}所はこれを発^{はっき}揮^きするに努^{どりよく}力^{りき}すれ
ば、短^{たんしょ}所は自^{しぜん}然^{ぜん}に消^{しょうめつ}滅^{めつ}する」

写真=埼玉県深谷市所蔵

言葉=渋沢栄一訓言集より引用



きたざと しばさぶろう
北里 柴三郎

いぎよう

おも

「偉^{いぎよう}業^{ぎよう}をなそうと思^{おも}うなら、その
基^き礎^そをしっか^{かた}りと固^{かた}めなさい」

写真=学校法人北里研究所提供

言葉=「北里柴三郎 伝染病の征圧は私の使命-（学校法人北里研究所発行）」参照



つだ うめこ
津田 梅子

なに

はじ

「何^{なに}かを始^{はじ}めることはやさしいが、
それ^{けいそく}を継^{けいそく}続^{そく}することは難^{むずか}しい。成^{せいこう}功^{こう}
さ^{せいこう}せることはなお難^{むずか}しい」

写真=津田塾大学津田梅子資料室所蔵

言葉=山崎孝子著「津田梅子」参照

日本の心
「江戸しぐさ」

【七三の道】しぐさ

江戸では、道の真ん中を歩くのではなく、自分の歩
く道を三割にして、あとの七割を急ぐ人のために開
けておくことをみんなが心得ていました。



高知県の昔の人も
こんな言葉を残しているよ！

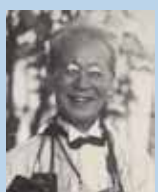
「郷土の偉人の言葉」から考えよう



坂本 龍馬

「世の人は我を何とも言わば言え、
我が為すことは我のみぞ知る」

写真・言葉=高知県立坂本龍馬記念館提供



牧野 富太郎

「植物は人間がいなくても少しも構わずに生活
するが、人間は植物が無くては生活の出来ぬ
事である」

写真=高知県立牧野植物園提供 言葉=「牧野富太郎自叙伝」より引用



岩崎 弥太郎

「屈せず氣力を奮って努力をしなさい。
誠意をもってやったことは後悔しなくて
よい。」

写真=安芸市立歴史民俗資料館提供 言葉=「岩崎弥太郎伝」参照

昔の人の言葉には、いろいろな意味が込められており、私たちに様々なことを教えてくれます。時には「勇氣」を、時には「夢」に向かう力がもらえます。他にも、あなたの心に響く「名言」をさがしてみましよう。

	自分が調べた「名言」	「名言」から感じたことや考えたこと
令和 年 月 日		
令和 年 月 日		

日本の心
「江戸しぐさ」

【うかつ謝り】しぐさ

うっかり人の足を踏んでしまった時、踏まれた方も
「こちらこそうっかりしてました」と謝ります。お互い
に謝るから、空気がトゲトゲしません。



「ことわざ」から考えよう

「ことわざ」とは、昔の人々の生活の中から生まれ、いろいろな教えや生活の知恵などを短く言い表した言葉のことです。

「たま玉みひかりがかざれば光なし」

どんなに能力や才能があつたとしても、それをみがく努力をしなければ、持っている力を発揮することはできないということ。

「えん縁したの下ちからの力持ち」

人目につかないところで、人のために力をつくすこと。また、つくす人のこと。

「さんにん三人よ寄もんじゅれば文殊ちえの知恵」

ふつうの人でも三人も集まって相談すれば、文殊さまのようなすぐれた知恵で、すばらしい考えがうかぶものだということ。

「しっぱい失敗せいこうは成功のもと」

失敗しても反省して直していけば、そのうち成功するものである。失敗は成功をうみだす力になるというはげましの言葉。

「なさ情けひとは人のためならず」

人に対して親切にすることというのは、その人のためになるだけではなく、自分にもよい結果となって返ってくるということ。

 「ことわざ」の短い言葉の中に、しつとりとしたストーリーがあり、さらに人々がよりよく生きていくためのヒントがたくさんふくまれています。

ほかに、あなたの心に響く「ことわざ」をさがしてみましょう。

	自分が調べた「ことわざ」	「ことわざ」から感じたことや考えたこと
令和 年 月 日		
令和 年 月 日		

日本の心
「江戸しぐさ」

【もったい大事】しぐさ

江戸では、ものや時間を大切に使うことをもったい大事と言っており、今でいうリサイクル上手。ものを作った人への感謝の気持ちも込められています。



「論語」から考えよう

「論語」は、今からおよそ2500年前の「孔子」とその弟子たちの言動をまとめた中国の書物です。

《いっぱい友達ほしいな》

し いわ とく こ かなら となり あ
子曰く、「徳は孤ならず、必ず隣有り。」

〈意味〉孔子先生がおっしゃった。

「思いやりの心をもっている人は、決してひとりぼっちにはならない。近くにいて、気持ちが通じ合う人が、きっとあらわれるものだ。」

《言葉だけじゃだめ》

し いわ こうげん れいしよく すくな じん
子曰く、「巧言令色、鮮し仁。」

〈意味〉孔子先生がおっしゃった。

「人によく思われようとして、心にもないことをしゃべったり、無理にいい表情をつくったりする人は、本当にやさしい人とは言えない。」

《人におしつけてはいけない》

し いわ おのれ ほつ ひと ほどこ
子曰く、「己の欲せざるところを、人に施すことなかれ。」

〈意味〉孔子先生がおっしゃった。

「自分がされたいやなことを、人にしてはいけない。」

 孔子の思想の中心は、「仁」と呼ばれるものです。「仁」とは、分かりやすく言えば「思いやりの心」です。「生き方の指針」とも言える「論語」を自分でも調べてみましょう。
みなさんの心にもきつと響き、生きる力を与えてくれるものと思います。

	自分が調べた「論語」	「論語」から感じたことや考えたこと
令和 年 月 日		
令和 年 月 日		

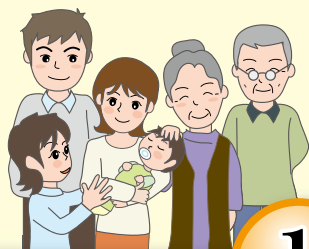
日本の心
「江戸しぐさ」

【こぶし浮かせ】しぐさ

渡し船や茶屋の縁台に座る時、1人でも多くの人が座れるように、あとから来た人のために、こぶし一つ分、腰を浮かせて席をつめる心配りが自然となされていました。



のエネルギー



1

毎日きちんと

あいさつをしよう

まずは、大人のあなたから「おはよう」「おやすみ」「ありがとう」のひと声をかけましょう。

【我が家のルール】

2

家族と**会話**をしよう

子どもがつらいときの信号を受け止めるのも
常日頃からの会話です。まず、話を聞くことから
はじめましょう。

【我が家のルール】

3

家族の一員として

役割をもとう

子どもにも継続して手伝いをさせる
ことで、家族の一員としての自覚や
責任、家族への感謝の心が育ちます。
また、生活の知恵も会得してい
ます。

【我が家のルール】

背中
で
教
え
る

大人
の
意
識
と
行
動
!

家庭の力は心

4

子どもに

がまんを教えよう

がまんするからこそ、得られたときのうれしさが実感できます。家庭での約束ごとを決めて、まず、親から守っていく姿勢が大切です。

【我が家のルール】

5

体験の中で子どもを

きたえよう

実体験が少なくなっている現在こそ、豊かな体験を通して働くことの尊さや自然の厳しさ、美しさを肌で感じ取らせましょう。

【我が家のルール】

6

先人や目上の

人を敬う心を育てよう

親が人に感謝し敬う心をもてば、その姿は子どもに伝わり、親への感謝を通して人を敬う心が育っていきます。

【我が家のルール】

7

人に迷惑をかけたときは

きちんと叱ろう

「叱る」と「怒る」は全く違います。「よくなってるほしい」という愛情をもって叱りましょう。

【我が家のルール】

社会の宝

育てよう!!

3

子どもたちと一緒に、地域をきれいにしよう!

美化運動など、地域のために貢献する運動を通して、自分たちの地域を愛する気持ちやマナーを大切にする心を育てましょう。

〔例〕地域の清掃活動の日に、近所の子どもを誘う。

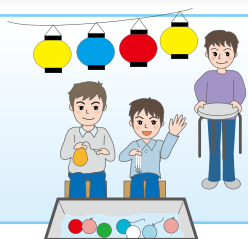


4

地域の行事に、子どもたちを積極的に参画させよう!

行事の準備段階から片付けまで参加させるなど、共同作業を通して人との付き合い方を身に付けさせましょう。

〔例〕昔の遊びや伝統行事を子どもに伝える機会をつくる。





子どもは

地域ぐるみで 子どもたちを

1

大人から、子どもたちに声をかけよう!

地域で顔の見える関係を築き、「こんにちは」「さようなら」「ありがとう」「すみません」などのあいさつが自然に飛び交う、ゆとりある心を育んでいきましょう。

〔例〕 登下校に合わせて散歩をして、子どもに声をかける。



2

マナー違反には、勇気をもって注意しよう!

人中では大声で携帯電話をかけない、ポイ捨てをしない、路上にツバをはかないなど、公共の場でのマナーの徹底を呼び掛けましょう。

〔例〕 道いっぱいに広がって歩いている子どもたちや、自転車の二人乗りなど危険な乗り方をしている子どもたちに注意する。



子どもと一緒にできる我が町の取り組みを書き込むコーナーです。

学校・家庭・地域が一体となって

子どもたちの道徳性の向上を目指しましょう

子どもたちの道徳性は、学校生活だけで育成されるものではなく、学校・家庭・地域、それぞれがその役割を果たし、一体となって子どもたちに関わることで、豊かに、たくましく成長していくものと考えます。地域の未来を支える子どもたちのために、学校・家庭・地域が一体となって子どもの道徳性を高めていきましょう。



高知県内で様々な取組が広がっています！

A市の取組

道徳科の授業で学習したことを教室の掲示板などに貼りだして、来校した保護者や地域の方に見てもらいます。

道徳のあしあと



B市の取組

コミュニティ・スクール(学校運営協議会)を活用して、子どもたちのための体験活動等について話し合います。

学校運営協議会

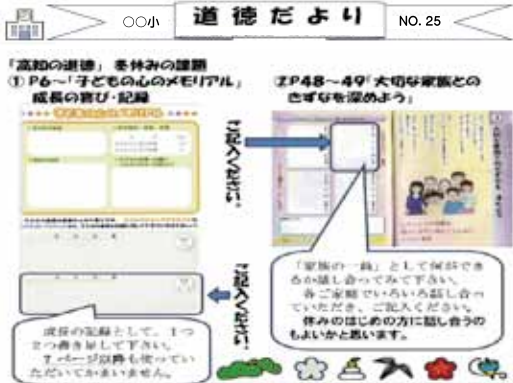
地域学校協働本部

協力

協力依頼



C市の取組



「家庭で取り組む 高知の道徳」を家庭で使っていただいたり、記入していただいたりしたものを通信でお知らせしています。

D町の取組

地域で学ぶ
地域から学ぶ

6年生 勤労・公共の精神（働くってどういうこと？）



道徳参観日



2年生 礼儀
(相手も自分も気持ちよく)

樹田学習



地域の方をゲストティーチャーとして招き、道徳参観日や学校行事に参加してもらっています。

他県では
山口県
萩市の取組

子どもたちが参画
(学校運営協議会)

子どもたちの思いを聞いて
協力できることを考えます。



社会総がかりによる 次代を担うひとづくりをめざして
～ CSの仕組みを基盤とした ライフキャリア教育の推進 ～

道徳教育とキャリア教育を一体的に推進し、子どもたちの道徳性を養っています。



令和4年度
「地域とともにある学校づくり」研修会 より

高知県子ども詩集「やまもも」

第47集

家庭で一緒に読んでみましょう。

へいてん

小高坂小一年 土田りの

わたしのいえは、おさけやさんです。
おじいちゃんとおばあちゃんが
しています。

でも、

きょうで、へいてんです。

おじいちゃんとおばあちゃんが、
年をとったから、そうだんして、
へいてんをきめたそうです。

おじいちゃんが、

シャツをしましました。

わたしたちかぞくと、

いとこのかぞくと、

ぜんいんがきて、

「おつかれさまでした。」

というて、

花たばとプレゼントを

わたしました。

おじいちゃんとおばあちゃんが、

花たばをもつて

しやしんをとっていました。

おばあちゃんは、

なみだが出ていました。

おじいちゃん、おばあちゃん、

げん気でいてね。

弟、けつこんする

斗賀野小四年 山本 悠乃

毎日毎日、

四才の弟がお母さんのひざの上で、

「ゆつくんは、お母さんとけつこんするが。」

と言います。

「お母さんにバラを買うの。」

赤いバラを買つて、

お母さんのポケットに入れるの。」

と、むねのポケットを指さしました。

「お母さんといっしょに、

けつこん式の服着て、けつこんするんよ。」

と言っていました。

「保育園が終わつたら、指輪買うきね。」

と言つたので、

お母さんは面白くて笑っていました。

「ゆつくん、悠乃とけつこんせんが。」

と聞いたら、

「えー、ゆつくん、お母さんが好き。」

とふられました。

久保家の仕事

吾北小五年 久保 尊楽

ぼくの家は、新聞配達をやっている。

お母さんは、新聞にチラシを折り込んだり、

郵送したりしている。

お父さんは、新聞をバイクに積みこんで、

清水から柳瀬までの配達をしていく。

姉は、吾北中学校の周辺を

歩いて配達している。

ぼくは、五時半ごろ起きて、

中学校の下の方と川井を走つて、

十二件ぐらゐの家に配達している。

時々、配達先のおじいさんやおばさんに、

出会うときがある。

「おはようございます。」

と言つて、新聞を手渡すと、

「おはよう。ありがどう。がんばつてね。」

と、声をかけてくれる。

朝早いので、つらいと思うこともある。

でも、ぼくが配る新聞を

楽しみに待ってくれる

地域の方がいる。

だから、ぼくは、

今日も新聞配達を続けている。

真夏のお手伝い

朝倉小六年 石元 明日香

「ありがとうございました」
声を張り上げる

正午になるといつそう暑さが増して
顔にも背中にも汗がにじむ
それでも

なぜか心はずがすがしい
日曜市の祖母のお店には
たくさんのお客さんが来る
「今日も暑いですね」

「えらいねえ。お手伝いかね」

お客さんとの何げない会話に元気をもらう
小銭の音がチャリチャリと鳴る
計算ミスをしないように慎重に暗算する
となりでは

祖母がいてねいにおつけ物の説明をしている
祖母もお客さんも、汗をふきふき話している
太陽がじりじりと照らす中
いろいろな人の声でにぎわう
負けないように私も声を張り上げる
「いらつしやませ」

ちつちやいころのお父さん

加茂小六年 西岡 美咲

「昔のお父さんの写真見ん。」

おばあちゃんが

アルバムを見せてくれた。

「いやあ、お父さんの
保育園のころや。」

「かわいらしいね。」

「この顔、美咲に似ちゆう。」

「本当に似ちゆう。」

お姉ちゃんに聞き返した。

「お父さん小学生のとき

背が高かつたんやね。」

「かつこいね。」

お父さんの

同級生になつた気分やつた。

「何しゆうが。」

お父さんが話しかけてきたけど、

「何もしてないよ。」

とはぐらかした。

なんかお父さんの秘密を

見つけたみたいで、

うれしかった。

まほうのドーナツ

香長中二年 岡田 華菜

涙が止まらないくらい友達とけんかした
家に帰つてすぐ部屋に閉じ込まつた
姉が入つて来た
「ドーナツいる？」

こんなときに何を言っているのか
だげど大好きなドーナツだった
姉はそれを知っている
気持ちさが少しゆるんだ

「何かあつた？何でも言うてみいや」

その言葉に涙がまた止まらなくなつた
でも今度は違う涙になつた
心配してくれることが

なぜこんなにうれしいのか
姉のまほうにかかつてしまった

冗談気味にいつもは反抗してくる姉だが
ついときは寄り添ってくれる
私も姉がしんどいときは

特別なまほうをかけてあげよう

1

正しいことには

A 自分自身に関すること

勇気を出そう

子どもと一緒に考えたり、話し合ったり、調べたりしたことを書き込んでいきましょう。子どもたち自身が書いてもいいよ。



「正しい」と わかっているのに、
なかなか実行できない自分。
「悪い」と わかっているのに、
「悪い」となかなか言えない自分。

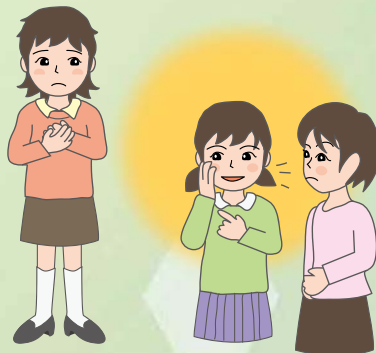
そんな自分に、
もう一人の自分が
ささやきかける。

さあ、

勇気を出して 強い自分になろうよ。



こんなとき、どうする？



ほん どう

ひと

本当に「**勇気のある人**」って、どんな人かな？

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

おこなう

勇気

やめる

勇気

勇気のある人間は、自分自身のことはいちばんおしまいに考えるものだ シラー：ドイツの詩人

にん げん

じ しん

かんが

し じん

「自由」と「自分勝手」はちがう

わたしたちには、自由がある。

わたしたちは、自分で考え、判断し、行動することができる。

なんて幸せなことだろう。

でも、『自由』と『自分勝手』とはちがう

みんなが周りのことを考えずに、

好き勝手に過ごしたら、

どんなことになるだろう。

学級、学校、社会は、

どうなってしまうだろう。



自分勝手な行動で、周りの人を困らせて
しまったことはありませんか。そのとき、
どんな気持ちになりましたか。

「自由」や「責任」について、考えたことを書こう。

記入した日
月 日
年生のとき

記入した日
月 日
年生のとき

記入した日
月 日
年生のとき

「家族の人から」

記入した日
月 日
年生のとき

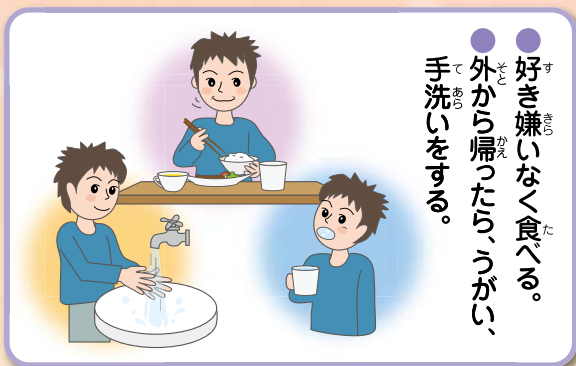
記入した日
月 日
年生のとき

義務心をもっていない自由は本当の自由ではない

なつめ そうせき わたし こじんしゆぎ
夏目 漱石 『私の個人主義』

自分をみがき、もったかがやこう

自分の健康は
自分で守ろう



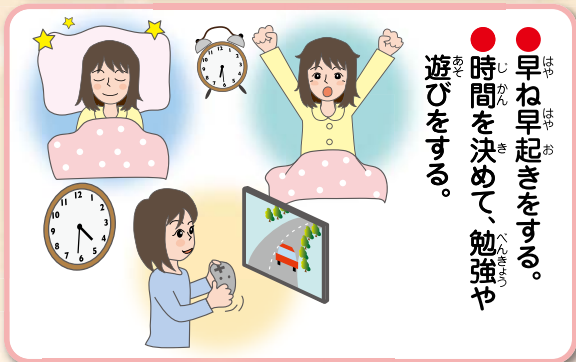
●好き嫌いなく食べる。
●外から帰ったら、うがい、
手洗いをする。

自分で身の回りを
きれいにしよう



●身の回りの整理整頓を
する。
●自分で掃除をする。

自分で上手に
時間を使おう



●早く早起きをする。
●時間を決めて、勉強や
遊びをする。

自分から進んで学習し
よう、体をきたえよう



●予習や復習をする。
●外に出て、力いっぱい
遊ぶ。



ほかに、どんなことがあるだろう。

自分の「よいところ」・「のびしたいところ」は、どこだろう。

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

自分をもっと

かがやくために、

できることは

自分でやり、

自分からすすんで

きもちのよい生活を
せいかつ

つくっていきこう！

こころざし た おそ けつ
志を立てるのに遅すぎるといことは決してない

せいい か
ボールドウィン：イギリスの政治家

1

B 人との関わりに関すること

あたたかい心を

とどけよう

人はだれでも、

やさしい『**思いやりの心**』を もっている。

思いやりの心は、

周りの人の心を感じ取ることから はじまる

心をしっかり開いて

困っている人、悲しんでいる人、喜んでいる人の

心を感じ取ろう。

思いやりの心を 行動にうつすことを、

『**親切にする**』という。

親切にすれば、

周りの人も 自分も

えがおで いっぱいになれる。

さあ、

自分から進んで

親切にしていこう！



いろいろな形で伝え合うことができる

思いやりの気持ち

態度で

言葉で

表情で

行動で



周りの人たちに、どんなことができるかな？

あなたから広げる

思いやりの『心』

親切な『行い』

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

ほんとうの勇気とやさしさは、ともに手をたずさえている

さっか いしや
サミュエル・スマイルズ:イギリスの作家・医者

「ありがとう」を伝えよう

毎日、

あたりまえのように わたしたちの周りであって、
わたしたちが使っている いろいろなもの。
たくさんの人の 思いと苦労があって
つくられたものばかりだ。

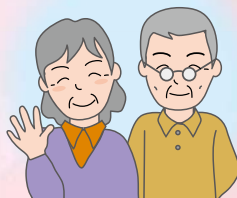
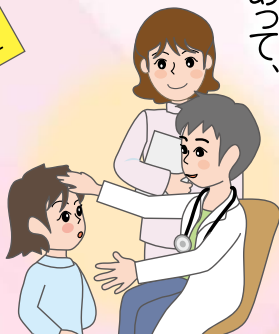
毎日、

あたりまえのように 過ごせているのは、
たくさんの人が 支えてくれているからだ。

そして、

人生の大先輩の お年よりの方々は、
長い年月をかけて
今のくらしを

つくってきてくれた。



あなたは、
どんな人たちに
支えられていますか。

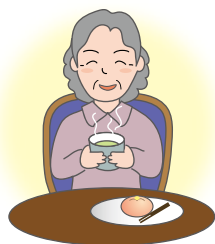


「感謝」の気持ちを伝えるために、できることを考えよう。

学校で



家庭で



地域で



ほめられる中で育った子は、いつも感謝することを知ります

アメリカインディアンのおしえ

時と場に応じた言葉づかいや態度

人は、

『**礼儀**』という形を

大切にすることで、

心を通わせ合う。

礼儀は、

真心の表れだ。

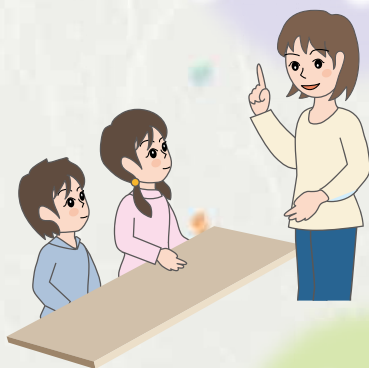
あなたは、

相手への真心を

礼儀で伝えていますか。

動作

- ・相手の話を最後まで聞く
- ・食事のマナーを守る
- ・順番を守る
- ・相手の目を見てあいさつをする



あいさつ

「おはようございます」
「行ってきます」
「こんにちは」
「さようなら」



言葉づかい

- ・電話の受け答え
- ・大人の人への話し方



礼儀は、心と心を通い合わせる
「かけはし」です。

「時と場に応じた言葉づかいや態度」

あなたはどんなことに気をつけたいですか？話し合ってみましょう。

動作

あいさつ

言葉づかい

した なか れい ぶ
親しき仲にも 礼儀あり ことわざ

じ な あいさつ
辞無ければ 相接らず

礼記

社会のきまりやマナーを守って気持ちよくすごそう

住^すんでいて よかったと

思^{おも}える社会。

こ^こに生^いきていて よかったと

感^{かん}じる社会。

その社会をつくるのは

わたしたち自^じ身^{しん}。

その社会を守っていくのも

わたしたち自^じ身^{しん}。



どんなときでも

や^{たい}く^{せつ}そくやきまりを大切にする。

これ^{にん げん}が人間のすばらしさです。

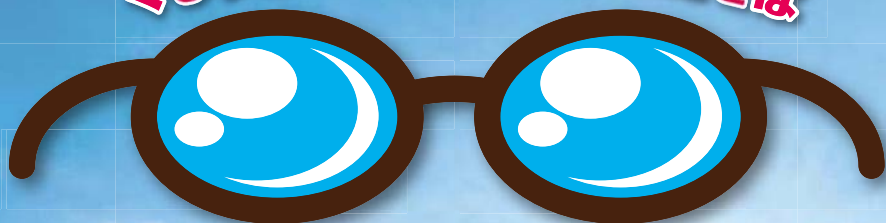
😊 こんなきまりがあるといい！

【こんな場面で】

【このようなきまり】

じ ぶん こう どう
自分の行動をふりかえてみよう。

ぐるりと まわりを 見わたせば



あ かん お
空き缶の『ポイ置き』?



かわ うみ みずうみ す
川や海や湖はゴミ捨て場ではないはず。



じゅんばん まも き
順番を守ることは気持ちいいね。



しくない けいたいでん わ めいわく
車内での携帯電話、まわりの迷惑。



き ばしょ せいとん
決められた場所に、整頓して。



も こ
ゴミの持ち込みはダメ!



き 来たときよりも うつく
美しく

よくしていきたい この社会

社会の役に立とう

だれか困^{いづ}っている人^{ひと}がいたら

もし助け^{たすけ}を求^{もと}めている人^{ひと}がいたら

なんとかしよう、なんとかしたいと思^{おも}うのが
人^{にん}間^{げん}の気^き持^もち。

わたしたちの力^{ちから}はわずかもしれないが、
きつとだれかの役^{やく}に立^たてるはず。

だから考^{かん}えてみよう。

わたしたちにできることを。

社会^{かい}への奉^{ほう}仕^しやボランティア活^{かつ}動^{どう}

すべての人^{ひと}の幸^{さい}福^{ふく}のために、社会^{かい}をよりよくするために
役^{やく}に立^たつことを。



ちょっとしたボランティア。
社会^とに役^{やく}立^たつことを通^{とお}して
自^じ分^{ぶん}も成^{せい}長^{ちよう}できる。

社会のためにできること・したいことは、どんなことがあるだろう。

がっきゅう がっ こう か てい ち いき

学級や学校、家庭や地域の役に立つことは？

だれのために？

なんのために？

記入した日 月 日 年生のとき

○どんなこと

○心がけたいこと

記入した日 月 日 年生のとき

○どんなこと

○心がけたいこと

記入した日 月 日 年生のとき

○どんなこと

○心がけたいこと

記入した日 月 日 年生のとき

○どんなこと

○心がけたいこと

【家族の人から】

【家族の人から】

もし神様がわたしを長生きさせてくださるなら、わたしはつまらない人間で一生を
お終わりたくありません。わたしは世界と人類のために働きます。

アンネ・フランク

大切な家族とのきずなを

深めよう

いつも 自分を支えてくれる 家族。

ときには、うるさいなあとかん

感じることもある。

放っておいてほしいときもある。

でも、

そんなときでも 感じる家族のきずな。

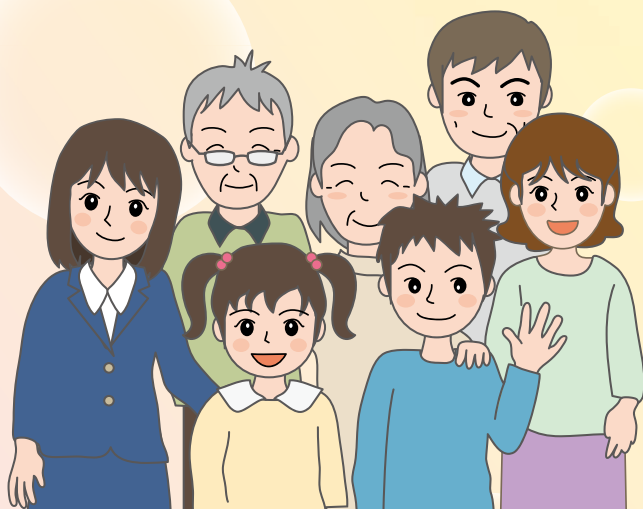
今でも、そして、これから

かけがえのない存在。

だから、自分も力になりたい。

親孝行をしたい。

かけがえのない、この家族のために。



わたしたちの成長を
あたたかみ 温かく見守りつづけてくれるひと……
それが、家族。

「家族の一員^{いち いん}」として、何ができるだろう。^{なに}

かけがえのない
家族

記入した日
月 日
年生のとき

記入した日
月 日
年生のとき

記入した日
月 日
年生のとき

記入した日
月 日
年生のとき

わたしの原点^{げんてん}は
ここにある！

【家族の人から】

【家族の人から】

わが家^{わが い}あんなに^{あんな}いい家庭^{か たい}で育てば、こども^こは、
この世^{このよ}の中^{なか}はいいところだと思えるようになる

ドロシー・ロー・ノルト+レイチャル・ハリス

我がふるさとを語ろう

わたしたちの心を
育てくれる
ふるさと。



あなたが 今、住んでいるところが
ふるさとです。

ふるさととは、一生 あなたを
はげまし続けてくれます。



わたしたちのふるさとに住む
人びと、生活、自然や文化、
それらはすべて、
わたしのたからもの。

ち いき なに
地域で、「じまん」できることは何かな？



心に残るふるさとを、文や絵に表そう。

記入した日 月 日 年生のとき

記入した日 月 日 年生のとき

記入した日 月 日 年生のとき

記入した日 月 日 年生のとき

【家族や地域の人にも聞いてみよう】

いのちを大切にして 精いっぱい生きよう

一生けんめい 生きる！

それは、

おもいきりがんばること。

いのちをかがやかせること。

自分のいのち、

みんなのいのち。

今あるいのちを

精いっぱい

かがやかせよう！



「いのち」の大切さについて、考えてみよう。

かぎりあるいのち

かけがえのないいのち

受けつがれるいのち

記入した日
月 日
年生のとき

記入した日
月 日
年生のとき

記入した日
月 日
年生のとき

記入した日
月 日
年生のとき

生きようとする意志の本質は、じゅうぶんに生き抜こうとすることである シュバイツァー

植物も動物も みんな、ともに生きている

D 生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること

自然とともに 生きている

身近な自然に 目を向けてみよう。

ふだん見なれている 町の中にも、

よく見てみると、

自然のすばらしさや ふしぎさを

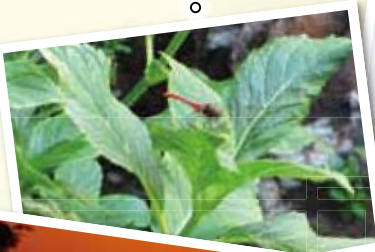
たくさん みつけることができる。

わたしたちは 大いなる自然の

あらゆる生命のめぐみの上に 生きている。

わたしたちは 大いなる自然から

生きる力を もらって 生きている。



「自然」とどのようにかかわっていけばよいだろう。



植物や動物とせつして、感じたり考えたりしたことを書く。

記入した日 月 日 年生のとき

記入した日 月 日 年生のとき

記入した日 月 日 年生のとき

記入した日 月 日 年生のとき

自然の美しさや

人の心の美しさに

ふれたとき、

心がふるえたり、

熱くなったり、

すがすがしくなったり

するのは、

なぜだろう。

それは、

わたしたちの中に、

美しい心が

あるからだ。

わたしたちの住んでいる地球は 自分たち人間だけのものではない レイチェル・カーソン

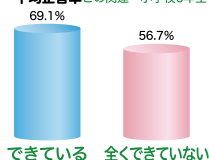
高知の子どもの未来のために 家族でつくろう！生活リズム

早ね 早ね 早おき 良いリズム！

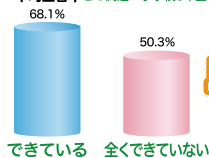
よい睡眠のリズムができると、朝、目覚める時間帯に体温が上昇し、活動する時間には体がしっかりと起きた状態になります。
また、「元氣ホルモン」もたくさん分泌され、心身を健康に保ちます。

早ね 早おきのリズムを大切にしましょう。

「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」と
平均正答率との関連 小学校6年生



「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」と
平均正答率との関連 小学校6年生



早おき



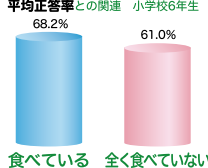
ごはんは体や脳のエネルギー源です。
朝ごはんを食べることで、体や脳が活発に働きはじめ、集中力ややる気が増します。
朝ごはんをしっかり食べて、元気に一日をスタートさせましょう。



朝ごはんを しっかり食べよう！

朝
ごはん

「朝食を毎日食べていますか」と
平均正答率との関連 小学校6年生



令和5年度 全国学力・学習状況調査結果(高知県)

元氣いっぱい 体を動かそう！

体を動かした後は、体も心もすっきりします。お腹がすき、夜眠くなります。

遊びやスポーツ、地域で行われている活動に参加して、体と心を大きく育てましょう。



本をたくさん 読もう！

読書

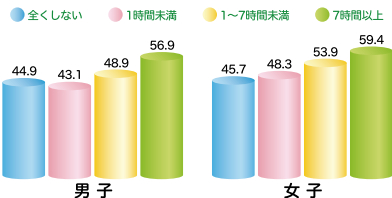
読書は、豊かな心と感性を育て、考える力や表現力をつけるとともに、人との絆をつくれます。

読みかせやみんなで読書をするなど、読書に親しむ環境づくりをしましょう。



運動

1週間の運動実施時間と体力合計点との関連
小学校5年生



令和4年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果(高知県)

規則正しい生活リズムが、子どもの意欲や情緒の安定につながります！

高知県教育委員会
高知県保幼小中高PTA連合体連絡協議会

©やなせたかし／やなせスタジオ

一人で悩まず相談を！

不登校やいじめ、子どもの教育に関する相談をお受けしています。



こんにちは 高知県 心の教育センター です。

★来所による相談★

(スクールカウンセラーによる個別相談・1時間枠)

電話にてご予約ください **予約電話番号：088-821-9909**

相談時間：午前9時～午後5時

開所期間：月曜日～金曜日、土曜日(第1・第3)、日曜日(第1～第4)
(祝日、振替休日、年末年始を除く)

- ◆事前に電話でのご予約が必要です。(相談時間内におかけください。)
- ◆東部・西部相談室での相談を希望の場合は、「東部(西部)希望です」と伝えてください。

心の教育センター(高知市)



東部相談室(田野町)

田野町ふれあいセンター
木曜日：午前10時～午後5時



西部相談室(四万十市)

幡多総合庁舎 別館2階
火曜日：午前10時～午後5時



★電話相談★

■24時間子どもSOSダイヤル(無料) **0120-0-78310** なやみいおう

相談時間：24時間

■教育相談電話 **088-821-9909**

相談時間：月曜日～金曜日の午前9時～午後5時(祝日、振替休日、年末年始を除く)

★Eメール相談★

■Eメールアドレス kodomo24@kochinet.ed.jp

相談時間：24時間 返信期間：月曜日～金曜日(祝日、振替休日、年末年始を除く)

※メールの返信には日数がかかることがあります。

※携帯電話の設定によっては返信が届かない場合がありますので、ご注意ください。
ドメイン登録をお願いします。

高知県心の教育センター



困ったことや悩んでいることなど、
気軽にご相談ください



〒780-8031
高知市大原町120-1
TEL 088-821-9909

わたしたちの 高知県を知ろう



県木
●ヤナセスギ

安芸郡馬路村魚梁瀬を中心に
に自生している杉を魚梁瀬杉と
呼び、吉野杉・秋田杉とともに日
本を代表する杉の1つです。
(昭和41年9月12日制定)

高知県

「自由は
土佐の山間より」



県鳥
●ヤイロチョウ

ヤイロチョウは5月頃、県西部
に少数渡来しますが、極めてまれ
で「幻の鳥」と言われています。
名前のように羽毛の色彩が8
色で、日本に渡来する鳥の中
では一番美しい鳥とされています。
(昭和39年5月10日制定)



県魚
●カツオ

サバ科に属し、温暖な海域に
広く分布しています。
高知県では昔から重要な水産
資源で、刺身やタタキで日常の
食卓に上がります。また、かつお
節や酒盗(カツオの内臓の塩辛)
にも加工されます。
漢字で「松魚」とも書き、めで
たい魚の代表格です。
(昭和63年6月21日制定)



県章

この県章は、土佐の「と
さ」を印象化したもので、
縦のけん先は向上を、円
は平和と協力を表してい
ます。
また、中の白い部分は
高知の「コ」を意味してい
ます。
(昭和28年4月15日制定)



県花
●ヤマモモ

日本の中部以南の温暖な海
岸近くの山地に自生する常緑高
木です。
3〜4月頃、花弁のない小さな
花が小枝の葉腋に咲き、雌雄異
株で、梅雨どきに暗紅色で甘
酸っぱく美味な実がなります。
(昭和29年3月22日制定)

高知家の唄

「ちゃぶ台と家族写真」

作詞 カツオ人間と高知家
作曲 岡本真夜

一緒に暮らそうや 四国の南
桂浜 四万十 みんなあで高知家
一緒に踊ろうや よさこい祭り
ライバルやけんど みんなあが高知家
そうやき 高知の魅力は 何より
ぬくい ぬくい 人
高知県は高知家 ひとつの大家族
一緒に笑おうや ひとりで悩まん
みんなあで高知家
てんぶら ようかん たたきに にぎり
なんでもものつちゅうが 皿鉢料理やき
カツオは にんにくで食べるがやき
次の日匂うても
全然問題ない だつて家族やきね
男も女も 知らん人でも
献杯 返杯 まとめて間接キッスやき
勝ち気な「はちきん」 頑固な「いこっそう」
みんなあで大騒ぎ
うっとおしいも味 人が濃い 高知家
高知家
おんなじ時代に（時代に） 生まれてほんで
家族になるらあて すごい縁やき
一緒に笑おうや（笑おうや） ひとりで悩まん
みんなあで高知家（ラララ）
いっつでも「おかえり」
ほんなら またね

この歌詞は、「人と人との触れ合い」を大切にし、「ちゃぶ台を囲めば、誰とでも家族の間柄のように親しくなれる」、「とにかく心があったかくて親切」、そんなあたたかい県民性を表しています。
(2013年度高知県PRキャンペーン第2弾「高知家(こうちけ)の唄」)



高 知 県 民 の 歌

明朗に力強く（♩=100）

西村 貞夫 作 詞

濱田 正形 作 曲

mf dolce



み な み な る じゆうのくににー



ごう けんのきう う けつぎう けてー た



けーより わ けの れきしととも にー ひ



か りは おー こ る ひかりは き た るー



『郷土の偉人』

人の一生は、何のためにあり、何を喜びとして生きているのか、
誰を思って生き、何を拠り所としてその生涯を歩むのか。
そんな答えのない問いを抱いたときに思い起こす先人の生き様がある。

それでは、郷土の偉人に触れてみよう。

本編は、郷土の偉人の業績やエピソードをもとにして
創作したものです。

「郷土の偉人」一覧

(五十音順)

いた がき たい すけ

板垣 退助



自由は死せず - 信念をつらぬいた退助 -

いわ さき や た ろう

岩崎 弥太郎



妙見山のちかい

おお え たく

大江 卓



人間の尊厳を守り抜いた男

おお はら とみ え

大原 富枝



書くことは生きること

くぼ ぞえ けい きち

窪添 慶吉



大敷網に夢を託して

けん しょう いん

見性院



戦国時代を賢く生きた一豊の妻

さか もと りょう ま

坂本 龍馬



龍馬の志

さき やま ひ さ え

崎山 比佐衛



夢は南米へ アマゾンの日本植民の父

さ たけ おと じ ろう

佐竹 音次郎



保育の父

た うち ち づ こ

田内 千鶴子



日本と韓国の愛の懸け橋

たけ ち はん べい た

武市 半平太



日本の夜明けに命をかけた男

てら だ たら ひこ

寺田 寅彦



人生とその出会い

なか おか しん た ろう

中岡 慎太郎



郷土の復興に、そして維新に尽力

なか はま まん じ ろう

中浜 万次郎
(ジョン万次郎)



明日への希望 - ジョン・マン・スピリッツ -

の なか けん ざん

野中 兼山



産業基盤をつくった「土木神の化身」

まき の とみ た ろう

牧野 富太郎



植物の不思議にひかれて

もり た まさ たけ

森田 正馬



世界から注目される精神療法考案

よし い げん た

吉井 源太



紙づくりの偉人

郷土の
1
偉人

自由は死せず―信念をつらぬいた退助―

板垣退助

板垣退助は、天保八（一八三七）年四月十七日に高知市の中島町に生まれました。

退助は、父のすすめで、早くから学問所にかよっていましたが、大変なわんぱく者で、あまり勉強はしませんでした。

そんな退助が二十才のとき、ささいなことでけんかをし、仲間にひどいけがをさせてしまいます。この事件は、たちまち藩主の耳にはいり、「高知城下には、ゆるしがあるまで出入りしてはならない」という重い罰をうけることになりました。

このことは、退助もよほどつらかったらしく、その日から、人が変わったようになりました。退助は、来る日も来る日もいろんな本をかたっぱしから手に取り、昼夜なくこれを読みふけりました。

そして三年後、罰がとかれ実家に帰った時には、世の中のことを考えることが出来る大人になっていました。

【藩主】

藩の領主。大名。

やがて父が亡くなり、家をつぐようになった退助は、まもなく藩の役人として仕事をするようになり、二十八才のときには、土佐藩の中心的な人物にまでなりました。

この頃、世の中は激しく移り変わろうとしていました。退助が三十一才の時、時の將軍徳川慶喜が政治の実権を朝廷に返す「大政奉還」がなされました。ただ、これを不満とする旧幕府軍があり、朝廷側の討幕軍との間で戦いが起こります。その時、土佐藩討幕軍の兵を率いたのが退助でした。この戦いで、討幕軍の勝利に貢献した退助は、その後も、藩主が土地と人民を朝廷に返す「版籍奉還」の実現においても中心的な役割を果たし、明治政府の大臣として政治に参加するようになりました。しかし、新政府も一枚岩でなく、朝鮮に対する外交施策に関して意見の対立がありました。結果、朝鮮に開国を迫ろうとする西郷隆盛や退助の主張が受け入れられず、このことをきっかけに退助は、自ら大臣の仕事をやめてしまいます。

退助らが去った後の新政府は、大久保利通を中心とした一部の藩の出身者によって政治が進められるようになりました。このことに対し退助は、（もっと多くの人の意見を聞いて、それをいかにせる政治をするべきだ。）と考え、「国民が選んだ議員によって作られる国会を開設してほしい」という内容

【実権】

真の権力。

【朝廷】

天皇を中心とした貴族による政治。

【討幕】

幕府をたおすこと。

【貢献】

力を尽くすこと。

【外交】

外国との交際。

【国会】

日本国憲法上、国権の最高機関で、かつ、国の唯一の立法機関。

の「民撰議院設立の建白書」を政府に提出しました。さらに、(全国の人たちに自由民権の考えを知ってもらうことが大事だ)と考え、多くの仲間とともに、あちこちで演説会を開いていきます。こうして高知でのろしを上げた自由民権運動は、たちまち全国に広まっていったのでした。

しかし、新政府も、この運動をやめさせようと厳しい取り締まりを行います。

そのような中での岐阜県での演説会。退助は、一時間半あまりの演説を終え、われんばかりの拍手が会場に鳴り響く中、一人で会場を後にしました。外はもう夕暮れ。目の前にそびえる金華山も夕闇の中に薄く煙っていました。と、その時です。突然大きな声で叫びながら、男が退助にぶつかってきました。ふいをつかれた退助は、胸に激しい痛みを感じながらも、

「なにをするか！」

といって、男をにらみつけました。男は、退助の気迫にたじろいでいるところを、異変に気付いて駆けつけてきた退助の仲間たちによって、すぐにとりおさえられました。退助は胸から血を流し、ぐったりとなってその場に倒れてしまいました。この時、退助は一命を取り留めたものの、このニュースは「板垣死すとも、自由は死せず。」という言葉とともにたちまち全国に伝わり、

【建白書】

政府などに自分の意見を申し立てる趣旨を書いた書面。

【のろし】

一つの大きなことを起こすきっかけとなる目立った行動。

【自由民権運動】

権利や自由の拡大を目標に掲げ、政治へ参加しようとした、明治前半期の政治運動。

【気迫】

何ものにも屈せず立ち向かっていく強い精神力。

【異変】

通常と変わること。



板垣 退助

(天保八年) 一八三七—(大正八年) 一九一九

明治政府を動かす中心人物として活躍。高知に立志社を設立するなど自由民権運動をリード。自由党総理になり、その後、大隈重信と内閣を組織。「板垣死すとも自由は死せず」の言葉は有名。

写真＝高知市立自由民権記念館提供

多くの人々の共感を得ました。

そして、とうとう政府もこの動きをおさえることができなくなり、国会を開く約束を、国民にしました。そして、明治二十二（一八八九）年二月十一日、新しい憲法がつくられ、その次の年に国会が開かれ、退助が夢にまで見た民衆議院の設立が成就したのです。

高知城追手門のほとりには、退助の銅像が立っています。右手を高く掲げたその雄姿は、あたかも私たちに、これからの日本の進むべき道を示し、語りかけているかのようです。

【共感】

他人の体験する感情や人の主張などを、自分も全く同じように感じたり理解したりすること。

【憲法】

他の法律・命令を以て変更することを許さない国の最高法規。

【成就】

できあがること。

【雄姿】

勇ましく堂々たる姿。

郷土の
きょうど
2
偉人
じん

妙見山のちかい

岩崎弥太郎

天保五（一八三五）年、土佐に生まれた岩崎弥太郎は、まけん気が強く、勉強熱心な若者でした。弥太郎は、よく、近くの妙見山に登り、目の前に広がる太平洋を見つめて、「海は大きいもう。もっと勉強して、この海のむこうの世界を相手に仕事したいのう。」と、ゆめをえがいていました。

弥太郎が二十一才のころのことです。弥太郎に、江戸（今の東京都）で勉強するチャンスがやってきました。しかし、弥太郎の家のくらしは、たいへん苦しく、弥太郎が江戸で勉強するためのお金はありません。

「こんなくらしの中で、ゆめをもっても……、どうせ無理じゃ。」

弥太郎は、これまでがんばっていた勉強を、しだいになまけるようになりました。そんな弥太郎に、母は、

「近ごろのおまえは、どうした。勉強をなまけてはいかん。」と、声をかけました。

「勉強したってむだじゃ。わしの思いは分かってもらえん。わしのゆめは……。」

弥太郎は、そうさけぶと妙見山の頂上までかけ登り、海をじっとにらみつけるのでした。

そんなある日のことです。母は、弥太郎をよび、つつみをさし出しながらしずかに言いました。

「弥太郎、これをもって行きや。」

「これは何じゃ。」

「山を売ったお金じゃ。このお金で江戸へ行って勉強してきいや。」

母は、父と相談して、家のたった一つのざいさんである山を売って、お金をつくたと言うのです。

「そんなことをしたら、これからのくらしがこまるろう。どうしてそんなことを



……。」

「弥太郎……、子のねがいを大事に思わん親は、おらんきね。」

弥太郎の目には、なみだがうかび、ぬぐってもぬぐってもあふれてくるのでした。

江戸に旅立つ前の日、弥太郎は、妙見山の頂上に立ちました。目の前に広がる海に、父と母の顔がうかんできます。

「わしの心には、この海より大きい父と母の思いがある。その思いにこたえたいんじゃ。わしはゆめをかなえるまで、この山には登らん。」

そうちかいを立てた弥太郎の目に、その日の海は、いちだんと大きくうつるのでした。

その後の弥太郎には、苦しい出来事もたくさんありました。江戸での勉強も、江戸へ行った次の年には、大けがをした父を助けるためにあきらめなくてはなりませんでした。

それでも、どんなときも妙見山でのちかいをわすれなかった弥太郎は、いろいろな所で出会った人たちから商売の仕方や外国のことを学びました。

郷土の偉人－岩崎 弥太郎－



岩崎 弥太郎

(天保五年) 一八三五～一八八五 (明治十八年)

三菱財閥の創始者。幼いころから秀才で、藩主にも認められ、やがて土佐藩のビジネスをまかされるようになる。明治維新後も海外との貿易に情熱を燃やし続け、「東洋一の海運王」になった。

写真Ⅱ安芸市立歴史民俗資料館

そして、やがて、国内だけでなく外国も相手に仕事をする海運会社をつくり、「東洋一の海運王」とよばれるほどになりました。父と母の思いを心にきざんで立てたあの日のちかいは、弥太郎が海を見つめてえがいたゆめをかなえる大きな力となったのです。

郷土の
3
偉人

大江 卓

(弘化四年)
一八四七〜一九二一
(大正十年)



日本で人権をいち早く訴えた先駆者。
政治家・実業家・人権活動家と様々な分野で活躍をした人物であり、どんな立場でも人権を大事にし、さまざまな差別と戦った。

写真…卓研究会(大江卓研究会)

人間の尊厳を守り抜いた男

今から百五十年ほど前。明治時代が幕を開け、近代化への道を歩み出した日本で、差別のない世の中を目指した人がいました。誰もが人間らしく、自分らしく生きるにはどうすればよいか。一生をかけて人の尊厳を守ろうとした大江卓です。

卓は江戸時代末期の弘化四(一八四七)年、宿毛を治める領主に仕える武士の子として大月町柏島で生まれました。宿毛にある「日新館」という学校で学問や武術を学び、やがて中岡慎太郎がつくった陸援隊に入って倒幕運動に力を注ぎました。

【先駆者】

他に先立って事の重要さに気がつき、それを実行する人。

【尊厳】

尊く、おごそかで、犯してはならないこと。

慶応三（一八六七）年に江戸幕府が滅び、翌年、明治政府が誕生しました。卓は政府の仕事をするようになり、二十五才で神奈川県（現・知事）となっていました。

そんなある日、卓の名を後世に残す大事件が起きました。

「マリア・ルス号事件」です。

明治五（一八七二）年、南米ペルーの汽船、マリア・ルス号が修理のために横浜港に入港してきました。船には、ペルー人の乗組員と二百人あまりの清国人が乗っていました。

停泊して間もない深夜のこと、やせ細った清国人が海の中に飛び込み、近くにいたイギリスの軍艦に助けられました。

清国人は、

「マリア・ルス号には清国人が二百人以上乗っている。我々は出稼ぎのために乗船したが、ペルー人から奴隷のような扱いを受けている。船に残されている仲間を何とか救ってほしい」と助けを求めたのです。

清国人から船内の様子を聞いたイギリス軍艦の乗組員も

「船内にいる清国人達を助けなくては」と考えましたが、

「日本の国で起ったことにイギリスが簡単に口を出すことはできない」と、この問題を日本政府に相談しました。しかし、日本政府の中では、国同士の交流がないペルーの問題に日本が深入りするのはいいことではないとの意見が多くを占めました。

そのような中、人間としての尊厳を守るべきであり、文明国家として人を奴隷のように扱ってはいけなないと考えていた外務卿（今の外務大臣）の副島種臣は、特別裁判を開き、その裁判長に大江卓を任命しました。人として生まれた以上自由であり平等であるべきだと考えていた卓は裁判長を務めることにして、奴隷のような扱いを受けている清国人の解放を誓いました。

裁判を開くことについて、他国のことに口を出すべきではないと、ペルーはもちろんポルトガルやドイツやフランスなど多くの国から非難が寄せられました。しかし、そのような抗議の中であっても、卓は、ひどい扱いを受けている清国人を助けようと、マリ・ア・ルス号に乗せられていた清国人全員を一時的に船内から保護し、裁判のための証言を得ることにしました。

そして、いよいよ裁判が始まりました。裁判が始まって裁判に反対する国々は抗議を続け、日本の主張に対しては反論を繰り返しました。それでも、この事件を人権を踏みにじる人道上の重大問題だと考えた卓は、粘り強く裁判を続けました。

【解放】

ときはなして自由にすること。

【非難】

欠点やあやまちなどを責めとがめること。

【抗議】

相手の発言・決定・行為などを不当として、反対の意見・要求を主張すること。

裁判が始まって二カ月になろうとする頃、卓は、乗船していた清国人を全
員解放するとの判決を言い渡しました。自由の身になった人たちは涙を流し
て喜び、故郷に無事送り届けられました。この判決に対してペルーは不服を
申し立て損害賠償を求めてきました。これに対し、仲裁裁判が開かれ、卓の
判決は間違ったものではなく日本には何の責任もないという判決が下されま
した。

これは、日本にとって初めての国際裁判であり、どんな困難に遭っても人
間の尊厳を守り通そうとした卓の判決が世界に認められたものでした。

いつも「誰もが人間らしく、自分らしく生きるにはどうすればよいか」と
いうことを考えていた卓。

人間の尊厳を守りたいという強い思いをもち、立場の弱い人たちの側に
立って訴え続けた卓の姿は、たくさんの人々に大きな影響を与えています。

【不服】

納得がいかず、不満に思うこと。

【損害賠償】

他人に損害を与えた者が、その損害を償い、損害がなかったと同じ状態にするこ
と。

【仲裁裁判】

国同士の争いについで、中立の立場の者が間に入って解決を図る裁判のこと。

書くことは生きること

大原 富枝

高知女子師範学校四年生の一学期、十七歳の富枝は、物理化学教室で血を吐いてしまいました。結核でした。十二歳で親もとを離れ下宿生活を始めた富枝は、次第に十分な栄養をとることができなくなり、病気が体に入り込んでいたのです。そして、昭和三（一九三〇）年、富枝は女子師範学校を辞め、吉野村（現在の本山町）へ帰ることになりました。結核という病気は、今では治療法もでき難しい病気ではなくなりましたが、当時は治る見込みのない病気として恐れられていました。

村に帰ってきて初めて外を歩いた時、田んぼ道で向こうから来る女の人とすれ違いました。富枝は笑顔で話しかけようとした。しかし、その人はさっと顔をこわばらせ、目をそらして横道へ逃げて行きました。誰も近づいて来ようとせず、話しかけてもくれません。それは、富枝にとって決して忘れられない辛く悲しい出来事でした。

そんな療養中の富枝をなぐさめたのが、父の書棚にあった本や、新聞記者をしていた叔父が見舞いに持って来てくれる文学雑誌でした。そして、体調

【師範学校】

小学校の教員を養成した学校。

【結核】

結核菌の感染によって起こる慢性感染症。

【こわばる】

しなやかだったものがかたくなる。

【療養】

病気をなおすため、治療すること。

のよい日には読書をしたり、短歌や俳句、小説を書いたりして過ごすようになりました。このような生活の中で、富枝に「小説を書く」という強い気持ちが生れました。書くことが、生きている証でした。

「私は生きる。生きて小説を書いて、私が生きているという証を、自分にも周りの人にも確かめるのだ」

二十歳の時に書いた、原稿用紙七枚の作品が初めて入賞したのをきっかけに、富枝は次々と文学雑誌に投稿を始めます。東京や愛媛、名古屋など、遠くに住む文学の友達もたくさんできました。二十五歳の時に書いた五十枚の短編小説『祝出征』は、昭和十三（一九三八）年の芥川賞候補にもなりました。

ついに富枝は文学の道に生きることを決心し、太平洋戦争が始まる直前、昭和十六（一九四一）年の夏、故郷を離れ上京します。二十八歳でした。富枝の体を心配する家族や周りの人たちは、強く反対しましたが、富枝の意思は強く変わることはありませんでした。

しかし、東京では、書くことだけで生きていくのは大変難しく、昼間は出版社で封筒書きのアルバイトをし、夜の間に小説を書くという生活が続きます。やがて戦況は悪化し、東京にも爆弾の雨が降るようになりました。富枝の住む家の、一軒おいた隣の家に爆弾が落ち、その家の人が亡くなってしまいました。うこともありました。それでも富枝は東京に残り、食糧不足による栄養失調

【投稿】

原稿を新聞社・雑誌社などに送ること。

【太平洋戦争】

第二次世界大戦のうち、主として東南アジア・太平洋方面における日本とアメリカ・イギリス・オランダ・中国等の連合国軍との戦争。

【東京】

東京へ行くこと。

【栄養失調】

食物を体内にとり入れることが不足して現れる異常状態。

と過勞でへとへとなりながらも、小説を書き続けたのでした。やっと終戦を迎えたとき、東京は焼け野原になっていました。

富枝が四十三歳の時、戦中戦後の無理な生活がいっぺんに体に出て、とうとう結核が再発してしまいます。ふたたび二年近い療養生活を送らねばなりませんでした。この時、壺井栄ら富枝の文学の仲間七人は、作品を一編ずつ出し合い、富枝の作品とあわせて一冊の本にまとめ『静か雨』と題する一冊の本を刊行しました。そして、本の印税を見舞い金として贈ってくれたのでした。こうして友人たちにも助けられながら、富枝は熱のない時に起きて、一枚一枚原稿を書きためました。そうして、やっと書き上げたのが「ストマイつんぼ」です。この作品は、昭和三十二（一九五七）年、第八回女流文学者賞に輝きました。そして、このとき、はつきりと、富枝の心に「書くことは生きること」という自覚が生まれたのでした。

翌年、富枝は高知に帰り、土佐山田町を歩きます。それは、土佐藩の執政であった野中兼山の娘、野中婉のことを取材するためでした。富枝は、昭和十九（一九四四）年に高知県立図書館で野中婉の手紙を書き写して以来、婉に対し強烈な共感と連帯感を抱くようになっていました。野中婉の苦しい境遇と自分の生きてきた道が重なり、「婉は私である」との思いを作っていたのでした。富枝は、これまでも何度か婉の生涯を題材に書いてはいたもの

【過勞】

働きすぎてつかれること。

【終戦】

戦争が終わること。

【再発】

再びおこること。

【印税】

書物をつくった人が、その書物の使用料として出版社などから受けるお金。

【執政】

政治上の事務職。

の、納得のいくものにならず、それでも「書きたい」という思いを膨らませていたのです。今回、再び婉を書こうと決心した富枝は、取材後、東京に戻り、昼夜なく机に向かい、二百五十枚を一気に書き上げました。そして、昭和三十五（一九六〇）年「群像」二月号に「婉という女」を発表。この作品が第十四回毎日出版文化賞、第十三回野間文芸賞に輝きました。この時、富枝は四十七歳。婉の手紙に出会い、婉と同じ年齢を生き、実に十六年の歳月をかけ、魂を注ぎ込んだ作品を完成させたのです。

平成十二（二〇〇〇）年一月二十七日に、八十七歳の生涯を閉じるまで、

富枝は小説を書き続けまし

た。両親や姉とともに眠る、

ふるさと本山町の墓所には、

「書くことは生きること」と

いう富枝の言葉が刻まれています。



大原 富枝

（大正元年）
一九二二—二〇〇〇
（平成十二年）

小説家。高知師範学校在学中に結核にかかり、中退。十年近い療養生活の中で小説を書き始める。『婉という女』で毎日出版文化賞および野間文芸賞を受賞。世界各国で翻訳出版される。

写真〓本山町立大原富枝文学館

郷土の
5
偉人

大敷網に夢を託して

窪添慶吉

「こんなにブリが捕れなかったら、どうやって生きていくがやろう……」
寄せては返す波のように、村の人たちの声が聞こえてきます。

ブリの回遊が多い、ここ中土佐町の上ノ加江は古くからブリ漁が盛んな地域です。しかし、明治の初めのころの漁法は小規模な建網漁と呼ばれるもので、漁獲高は少なく、漁師たちの生活は苦しいものでした。そのうえ、幕末から明治の初めにかけてアシカがやって来て、ブリ漁は深刻な打撃を受けていました。

上ノ加江のこの苦しい状況を救った人、それが、上ノ加江で生まれた窪添慶吉です。

明治二十七（一八九四）年、当時、小学校の先生をしていた慶吉は、村の苦しい状況をなんとかしたいと考え、出かけた講演会で、全国に先駆けて、

【漁獲高】

漁場でとった水産物の量を金額で示したもの。

宮崎県で行っているブリの大敷網のことを知りました。大敷網は、魚の通り道に大きな網を仕掛けて一度にたくさん魚をねらう漁法です。
「上ノ加江の漁業を救うのはこれしかない。みんなの生活を豊かにするのは、この大敷網じゃ！」

慶吉は早速、上ノ加江の建網業者に大敷網を取り入れるように勧めました。
しかし、

「名誉と出世のために漁民を犠牲にするのか。あんなやつの話に乗ったら、家がつぶれてしまうぞ。」

と心ないことを言う人もいました。

（波の音しか聞こえなくなってしまったこの海辺を、活気ある声で満ちたらしい……、ただ、ただそれだけなのに……。）

慶吉は、決意を固め、先生の仕事を辞めて村長になると、郡会を動かして宮崎県へ視察に出かけることにこぎつけました。

視察から帰った慶吉は、大敷網への思いを一層強くし、来る日も来る日も漁師の人々を説得し続け、三十回以上も会合を重ねました。そんな慶吉の姿を見

【名誉】

人の才能や努力の結果などに関する輝かしい評価。

【視察】

実際に、その場所に行って、状況を調べ見きわめること。

【説得】

よく話して、相手に納得させること。

て、漁師の人たちも、少しずつ大敷網漁に賛同してくるようになりました。そんな中、またもや大きな問題が持ち上がりました。大敷網の敷き込みにかかる巨額の資金問題です。

「宮崎でうまくいっても上ノ加江でうまくいくとはかぎらない。」

「莫大な費用をかけて失敗したときには誰が借金を背負うのか。」

失敗すれば村は総倒れという大仕事にお金を出してくれる人は誰もいません。

（思いを分かってもらうまで、とにかく話をするしかない！）

まず、慶吉は、高知市と須崎市に働きかけました。何度も断られ、言い負かされましたが、それでも、慶吉は、また出かけていきます。

（本当の負けは、あきらめたとき。）

慶吉は、そう思いながら資金集めのために奔走し続けました。

そして、とうとう、厳しい契約の条件はあったものの、須崎の資産家から資金を集めることに成功したのです。

「ついにやった！これで大敷網漁ができる。」

明治三十一（一八九八）年二月十五日、最初の大敷網を敷き込み、ブリが

【賛同】

他人の意見・提案などに、賛成・同意すること。

【総倒れ】

無理な競争をしたり、助け合ったりした結果互いにダメになること。

【奔走】

かけ回って、物事がうまく進むように努力すること。

かかるのを待ちました。不安と期待の一夜が明け、慶吉は、網が上がってくるのを祈るような思いで見つめています。ゆっくりゆっくり引き上げられる網が海の底から姿を現したとき、慶吉の目に、銀色に輝く大敷網が飛び込んできました。ブリが大きな網の中で所せましと飛び跳ねています。

慶吉は、寄せては返す波のように海辺にとどろく歓喜の声をいつまでもいつまでも聞いていました。

豊漁は続き、漁から戻ってきた船からは、太ったブリが次々と波打際に放り出され、あつという間に浜は、ブリで埋め尽くされています。敷き込み期間の三月末までに、売り上げはなんと、かかった費用の十倍以上にもなりました。

こうして、上ノ加江の街の通りには、高知や須崎からやって来た料理屋や呉服店が立ち並び、人が通るのもやつというほどのにぎやかな光景が見られるようになりました。



【歓喜】

非常に喜ぶこと。

（大敷網でみんなの生活を豊かにしたい！）

慶吉の描いた夢が現実となって目の前に広がったのです。

慶吉の功績により、上ノ加江は、宮崎県の赤水（現延岡市）、三重県の九鬼（現尾鷲市）と並ぶ「日本三大ブリ漁場」と呼ばれるようになりました。

それから幾多の月日は流れ、大敷網で栄えた昔を知る人は少なくなってきましたが、高知県で初めて大敷網漁を取り入れ、上ノ加江に活気をもたらし、窪添慶吉の功績は色あせることはありません。

どんなことがあってもあきらめなかった信念の人、窪添慶吉の記念碑は、上ノ加江地区の漁港公園に建てられ、今も私たちを見守っています。



窪添慶吉

（安政六年）
一八五九〜一九二三
（大正十二年）

高知県に定置漁業の隆盛をもたらせた先覚者であり、創始者。大敷網の研究に専念し、京都の漁業組合と共同経営を行うなど、地方のブリ大敷網の漁業発展にも寄与した。

写真Ⅱ 中土佐町教育委員会

【功績】

あることを成し遂げた手柄。すぐれた働きや成果。

【幾多】

数量の多いこと。

【活気】

活動力が盛んで生き生きとした気分。

【信念】

それが正しいとかたく信じ込んでいる心。



『郷土の偉人』を読んで、偉人の
生き方や考え方をまとめてみよう

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

郷土の
6
偉人

見性院

(弘治三年)
一五五七〜一六一七
(元和三年)



土佐国土佐藩初代藩主、山内一豊の正室。夫に名馬を買わせるために大金を差し出したエピソードは、賢い妻の逸話として有名。

肖像画…高知県立高知城歴史博物館所蔵

戦国時代を賢く生きた一豊の妻

戦国時代に織田、豊臣、徳川家の三代の殿様に仕えた武士がいます。天文十四(一五四五)年に生まれた土佐藩初代藩主・山内一豊です。この一豊の立身出世を導いた人物、それこそが、知恵と機転で一豊を支えた妻の見性院です。才色兼備の女性だったといわれています。

一豊と見性院の出会い、見性院が一豊の母に裁縫を習ったことが縁だとされています。見性院が嫁いだとき、一豊は貧しい青年武士で、その日の食べる物にも困る生活でした。

【正室】

正式な妻。

【逸話】

あまり世間に知られていない話。

【立身出世】

社会的に高い地位について有名になること。

【機転】

その場の状況に応じ

ある日、一豊は、馬を一堂に集めて検分する馬揃えを見に行きました。そこには数々の馬がいましたが、中でもひとときわ異彩を放つ駿馬に目にとまりました。時は戦国時代。武將は馬を大切にし、名馬にまたがる武士は一目置かれる存在であった頃です。一豊は思わず「欲しい…」とつぶやきました。しかし、その頃まだ織田家の一家臣でしかなかった一豊には、とても手が出る代物ではありません。後ろ髪を惹かれる思いで家路につきました。

その晩、一豊から話を聞いた見性院は、すぐさま「これで買ってくださいませ。」と、十両もの大金を迷いなく渡したので、そのお金は、「一豊様に何かあったら」と、親から嫁入り前に渡されていたものでした。このとき買った名馬は、その後、見事に信長の目にとまり、一豊の評価は一気に高まっていったのでした。

これが、「見性院の内助の功で一豊が出世できた」と言われる所以です。



て、頭や体を素早く適切に働かせること。

【才色兼備】

優れた才能や知恵と美しい顔かたちの両方を備えていること。

【裁縫】

布を切って縫い合わせ、衣服を作ることを。

【検分】

立ち会って検査し、見届けること。

【異彩】

さわだつて優れた様子。

【駿馬】

すぐれてよく走る馬。

【後ろ髪を惹かれる】

あきらめきれず立ち去りがたいこと。

【内助の功】

妻が夫の活躍を支えること。

【所以】

理由。

郷土の
7
偉人

龍馬の志

坂本龍馬

「龍馬、たのむ。知恵を貸してや。」

土佐藩参政の後藤象二郎は、長崎に在る龍馬の所にかけこんで来た。

「土佐藩は、どうしたらえいがじやろう。このまじやあ、徳川幕府は、薩摩や長州と戦をすることになる。」

慶応三（一八六七）年、薩摩藩や長州藩は、徳川幕府をたおし、朝廷を中心とした新しい世の中をつくっていかうとする動きを強めていた。けれど、土佐藩は、これまで公武合体を考え、幕府も生き残る道を主張してきた。山内家は、徳川幕府に恩もある。幕府が戦でたおされることは、さけない。これが土佐藩の考えであった。

「そうじやのう。けれど、わしは、土佐藩を脱藩した者じやき。今さら藩のために動かないかんといいことはないう。」

「龍馬、たのむ。藩の一大事じやき、まあ、考えてみてくれんかよ。ほんで、わしといっしょに、京におる大殿様の所へ行て、わが藩は、どうしたらえ

【参政】

藩の政治を進める役人。

【薩摩】

今の鹿児島（かごしま）県。

【長州】

今の山口県。

【朝廷】

天皇を中心とした貴族による政治。

【公武合体】

朝廷と幕府が協力して政治を進めること。

【脱藩】

藩のおきてを破って、藩をぬけ出すこと。

【京】

今の京都府

いかを言うてや。こんなことが考えられるが、世の中をよう見てきたおまんしかおらんき。明日、藩船『夕顔』で待ちゆう。たのおぞ。龍馬。」

龍馬は、土佐では、郷土という身分の低い武士であった。土佐藩の厳しい身分制度のもとで苦しみ、文久二（一八六二）年、二十八才のとき、土佐を脱藩した。その龍馬に、藩の参政が、頭を下げてたのむのである。

龍馬は、必死でたのお後藤の顔をまじと見つめた。

「一晚、考えてみらあよ。」

龍馬に考えがないわけではなかった。けれど、なぜ、土佐藩のために力を貸さねばならないか。脱藩の後、龍馬は、土佐藩にいたころ共に苦しい思いをしてきた仲間たちと長崎で「海援隊」をつくり、今は、海を相手に仕事をしている。土佐藩のために動いたとなれば、海援隊の仲間も快くは思わないだろう。

龍馬は、天をおおいで夜空を見上げた。

（幕府も土佐藩も、荒波にうかぶ船よのう。勝先生じやったら、どう言うろう。）

かつて、龍馬は、幕府の役人勝海舟の門下生となり、航海術や世界のことを学んだ。勝海舟は、咸臨丸艦長としてアメリカにわたったこともあり、外

【大殿様】

土佐藩十五代藩主山内容堂（やまうちようどう）。

【夕顔】

土佐藩の船。

【郷土】

土佐藩の武士は、上士（じょうし）、白札（しらふだ）、下士（かし）と分けられ、郷土は、下士に属する身分とされた。

【海援隊】

長崎の龜山（かめやま）に、龍馬がつくった商業、海運業の仕事をする会社。一八六七年、「龜山社中」から「海援隊」と名前を変えた。

【勝海舟】

幕末、明治時代の政治家。一八六三年、勝海舟は、山内容堂と

国にもくわしかった。

（勝先生は、世界を見て、日本のことを考えよった。日本のこと……。）

夜空の星に、土佐藩で苦しい思いをしてきた仲間の顔がうかぶ。藩のために人生をささげてきた人たちもいた。幕府の命令に従って生きること、苦しむ人たちにも出会った。

（この国は、幕府や藩のためにあるのか。）

龍馬は、夜空の星をじっと見つめた。

明け方近く、港に泊まる藩船「夕顔」に一隻の小舟が近付いた。

「おう、龍馬、龍馬か。よう来てくれた。藩に力を貸してくれる気になったか。」

後藤が、目をかがやかせて声を上げた。船に乗り込む龍馬を朝日が照らす。

「こんまいこと言いな。藩じゃ幕府じゃ言えよったちいかん。この国を何とかするがじゃ。戦で幕府をたおしたち、国を動かし



会って龍馬の脱藩罪（だっぱんざい）の許しをとりつけた。同年、龍馬は、勝海舟の海軍塾（じゅう）塾頭となる。

【咸臨丸】

一八六〇年、アメリカにわたった船。通訳としてジョン万次郎（まんじろう）も乗船していた。

ていく人が変わるばあよ。世の中の仕組みを変えんと新しい国は、いつまでたってもつくれん。」

龍馬は、力強いまなざしで後藤をじっと見つめた。

「わしは、藩や幕府のために言いゆうがやない。日本を、ここに暮らす一人一人のための国にしていくながじゃ。」

「龍馬、どういふことぜよ。」

「ええか、幕府は、政権を朝廷に返す。「大政奉還」じゃ。ほんで、この国をみんなあの力で動かしていくような新しい国に変えるがじゃ。」

あまりの迫力に、後藤は、いっしゅん言葉を失った。

「確かに、戦をせんずつ国を変えていくえい考えじゃ。けど、みんなあで動かしていく国とは、どういふことぜよ。」

「それはのう、まず、外国にもあるみたいに議会いうもんをつくって、ものごととは、みんなよく議論をして決定するようになる。それから……。」

龍馬は、幕府が政権を朝廷に返した後の新しい国づくりのための方策を話し始めた。これが世に有名な「船中八策」である。

「たまげた。龍馬、ようそんなことを考えたのう。おまんの志は、ふといのう。」

【政権】

国を治める政治の力。

【大政奉還】

国の政治の力を幕府から朝廷に返すこと。

【船中八策】

船中八策は、龍馬が語ったものを海援隊の長岡謙吉（ながお けんきち）が書き記したとされている。勝海舟をはじめ幕府役人の大久保一翁（おおくぼ いちお）や、学者の横井小

龍馬は、遠く海の果てを見つめた。龍馬、三十三才のことであった。

「船中八策」は、後藤から山内容堂に伝えられ、土佐藩の建白書として幕府に出された。十五代將軍徳川慶喜は、これを受け入れ、慶応三（一八六七）年十月十四日「大政奉還」が決まった。「船中八策」は、後の近代国家日本の指針となって受け継がれていくこととなった。



坂本龍馬（天保六年）
一八三六〜一八六七（慶応三年）

明治維新を実現させるという「日本の夜明け」を実現させたリーダー。海援隊を組織、龍馬のまとめた「船中八策」は大政奉還を軸に日本国憲法を定めることなどを唱えた。三十三歳で暗殺された。

写真：高知県立坂本龍馬記念館提供

楠（よこいしようなん）など、龍馬が出会ったいろいろな人たちが学んだ新しい国づくりのための八つの方策が示されている。

【建白書】

大事な考えを書き、差し出す文書。



『郷土の偉人』を読んで、偉人の
生き方や考え方をまとめてみよう

記入
した
日

月

日

年生
の
とき

記入
した
日

月

日

年生
の
とき

記入
した
日

月

日

年生
の
とき

記入
した
日

月

日

年生
の
とき

郷土の
8
偉人

夢は南米へアマゾンの日本植民の父——崎山 比佐衛

「一粒の麦、地に落ちて死なずばただ一つにてあらん。もし死なば、多くの実を結ぶべし。私は、ここに骨を埋める覚悟です。」

昭和七（一九三二）年、五十七歳のとき、南米アマゾンの上流マウエスにその家族たちと共に移住した比佐衛は、迎えてくれた人たちに向けて到着の思いをこう語りました。

この人こそ、後に「アマゾン日本植民の父」と呼ばれた崎山比佐衛です。

比佐衛は、明治八（一八七五）年、長岡郡本山村吉延（現在の本山町）に生まれました。幼い頃より向学心が強く、小学校を卒業した後、昼間は農業を手伝い、夜は学校の先生の家に通って勉強するほどでした。また、十六歳になると、東京に行ってさらなる勉学にも励みました。

そんな比佐衛に、人生を動かす最初の出来事がおとずれます。

——第一次北海道移民団募集——

【植民】

本国以外の土地に移り住んで仕事を行うこと。

【一粒の…】

「一粒の麦が地面に落ちて無数の実を結ぶように、一人の犠牲によって多くの人が救われる」と説いたイエス・キリストの言葉。

【移民】

働く目的で、他の土地に移り住むこと。

このチラシを見た十八歳の比佐衛は、人のために大地を拓くことに思いを馳せるようになります。そして、開拓者となって北海道に移り住んだ比佐衛は、昼は雪の大地に挑み、夜は机に向かう生活を続けました。

月日は流れ、北海道開拓が一段落した頃、比佐衛の向学心は更に燃え上がり、北海道を後にして、仙台の東北学院大学普通科（中学）や東京の青山学院において勉学に励むことになりました。この時、比佐衛は二十四歳。

当時、日本は、国内に働き場所が少なく、大学を卒業しても仕事に就けないという状況にありました。比佐衛は、大学に通うかたわら、そうした学生たちの様子を見て、何とか力になれないかと思案するようになります。そのとき、浮かんできたのが海外開拓です。北海道での開拓経験がある比佐衛は、外国に目を向け、未開の地を切り拓き、田や畑、農場などを作る海外開拓の道に希望を見いだそうとしたのです。

そう思い立った比佐衛は、いてもたってもいられず、自ら北米と南米の視察に出かけました。

南米アマゾンの地に立った比佐衛。吸い込まれそうなほど澄み渡った紺碧の夜空。時を隔てて輝きを届ける星たち。目を閉じた比佐衛の心に、北海道での開拓の日々や、日本で生活に苦しむ人々のことが浮かびます。どこまで

【馳せる】

気持ちなどを遠くまで至らせる。

【紺碧】

黒みがかった濃い青。

も広大な土地、夜空に輝く星々。比佐衛は深く息を吸って、夜空を見上げました。

この星空のもとで、地に足を付けて生きていく。

―目は星に、足は地に―

比佐衛には、大自然に抱かれたアマゾンの星が、まぶしく輝いて見えました。

帰国した比佐衛は、さっそく、「海外植民教育会」を結成し、大正七（一九一八）年には、「海外植民学校」を建て、海外で開拓し、定住するための指導者の育成に励みました。

開拓は、木を切り、森を拓くことです。しかし、比佐衛は、木を植える開拓者でありたいと願っていました。どうすれば木を切らないで開拓できるのか、この大地からの問いに向き合い続ける開拓者でありたい、そう願っていました。そんな比佐衛の思いや指導のもと、学習を積んで南米に向かった卒業生は、七百人以上にのぼります。

そして、ついに比佐衛は、五十七歳の時、自分自身も南米アマゾンのマウエスの地に到着したのです。マウエスで比佐衛を待っていたのは、どこまで

も広がる大地と、かつての教え子たちでした。

「先生、待っていました。ひたすらに待っていました。」

声をふるわせる教え子たち。比佐衛は、そっと教え子の肩に手をのせて言いました。

「私は、このマウエスの地で一粒の麦になりたいと思います。心細い思いをさせましたね。」

教え子たちの瞳に、夜空の星がにじんでいました。

マウエスで、開拓者となった比佐衛は、来る日も来る日も、畑にくわを打ち込みます。つぎはぎだらけの服を着て、高熱のときも、雨の日もくわをひとふり、ひとふりと打ち込みます。開拓者として、その生き方を大地に問い続けていたのかもしれない。



昭和十六（一九四一）年、比佐衛は、マラリアをわずらい、六十七歳の生涯を閉じます。

その最期のときまで、比佐衛は、大地に生き、地に足を付け、そして開拓の理想を追い求めました。

―目は星に、足は地に―

現在、マウエスには、比佐衛の功績をたたえて「崎山比佐衛公園」が造られ、そこには、「アマゾン日本植民の父」の墓碑が建立されています。

〔参考文献〕「超積乱雲」醍醐麻沙夫（二〇〇八年）無明舎



崎山比佐衛 ―（明治八年）一八七五―（昭和十六年）一九四一

本山町出身。明治期から昭和にかけて、国内の就職難の解決策を南米移住に求め、東京に「海外植民学校」を創設。役員名簿には、渋沢栄一、浜口雄幸など当時の政財官や軍の重鎮らが名を連ね、比佐衛の植民事業は大きな注目を集めていた。

【わずらう】

病気になる。

【功績】

優れた働き。



『郷土の偉人』を読んで、偉人の
生き方や考え方をまとめてみよう

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

郷土の
9
偉人

保育の父

佐竹 音次郎

村にある古い松の木をじっと見上げる少年がいる。少年の名は佐竹音次郎。音次郎は、辛いことがあると天高くそびえるこの松の木を、時には願いを込めてじっとながめ、時にはそっと語りかけ、心を落ち着けていた。音次郎の心を松の木は知っていたのかもしれない。

この少年こそが、後に「保育の父」と呼ばれ、児童福祉の先駆者としてその発展に貢献することとなる人物であった。

佐竹音次郎は、今から百五十年ほど前に、下田村（現在の四万十市）の農家、宮村家の四男として生まれた。貧しい暮らしの中で多くの子どもを育てることができなかった時代、音次郎は中村町（現在の四万十市）の佐竹家へ養子に出された。音次郎、七歳、父母の手のぬくもりを感じはじめ頃のことであった。

佐竹家の養子となった音次郎であったが、年月の流れの中で養母と別れ、養父と二人で暮らすことになる。そして、家業の手伝いのため、あんなに好きだった寺子屋へも通えなくなり、次第にやつれていく。そんな音次郎の様

【児童福祉】

すべての児童に平等に健康や生活、教育を保障すること。

【先駆者】

先になって物事をなす人。

【養子・養父・養母】

養子縁組によって子供となった者。その父親。その母親。

子を見かねた実の父母は、音次郎が十三歳のとき、学校へ行かせようと下田村へ呼び戻した。ところが、父は家業を覚えさせるため、音次郎に学問を禁じ、十五歳となった音次郎は学校を止めて、農作業を手伝わなければならなくなった。学問の道を諦めきれずに、日に日に体を弱らせていく音次郎。父は、その様子を見て、農業を教えることを諦め、とうとう音次郎が勉強することを許した。

喜んだ音次郎は、勉強に励み、二十三歳のときには東京の小学校に勤めるようになった。「困っている人たちや恵まれない人たちを助けたい」との天職に向かっての思いを教員という一つの形として実らせていく。しかし、ここにとどまらず更に勉学に励み、二十九歳で医者となって神奈川県で医院を開設した。

ある日のこと、音次郎の医院に、幼い子どもを連れた母親がやって来た。「肺がかなり弱っていますね。このままだと娘さんにまで病気が移ってしまいかもしれない。すぐに入院をしてください。」

うなだれて聞いていた母親がぼつりとつぶやいた。

「先生……、私は夫を亡くし、頼るべき親、親戚もおりません。」

母親の目から涙がこぼれ落ちた。

「私が入院をしたら、一体、この子はどうなるのでしょうか。」

【家業】

一家の暮らしを立てるための職業。家代々の職業。

【天職】

その人に生まれつき備わっている性質に最も合った仕事。

音次郎を真まっ直すぐに見みつめる母親。その細ほくなった手は、娘の手をぐっと握にぎりしめていた。音次郎は一瞬いしゆんだけ目を閉とじてきっぱりと言いった。

「私がお世話せわをしましょう。」

音次郎に迷まよいはなかった。

このことがきっかけで、音次郎はけがや病氣を治療ちりょうするだけでなく、様々な事情じじうから困まよって訪おとずれてくる子どもたちを助けるようになった。

「すでに我が家わがやに受け入うれたからには、自分じぶんは彼らの父であり彼らは自分の子どもである。そうすると、彼らはもはや孤児こじではない。立派りっぱではないかもしれないが、自分という親ができている。彼らはもう孤児とは呼べない。」

当時とうじ、親が世話のできない子どもを預あづかる施設を、「孤児院」と呼んでいたが、音次郎は「孤児」としてではなく、家族の一人として預かり、我が子と分け隔へだてなく育てたいと考えていた。こうした考えから、音次郎は「保育」という言葉ことばを使って、「小児保育院」を医院に併設へいせつした。現在、児童養護施設と呼ばれるものの礎いしづえである。

その後は、こうした音次郎の活動かつどうの話はなしが広がり、大勢おおいぜいの人が音次郎を頼たのってくるようになった。子どもたちが増えていくにつれ、医院での収入しゅうにゅうだけでは子どもたちの世話も生活も苦くるしくなり、音次郎はお金の工面かねに奔走ほんそうしなけ

【孤児】

両親を失った子ども。

【礎】

物事の基礎となるものの。

【工面】

さまざまに工夫して必要なお金を整えること。

ればならなくなった。こうした苦しい時期に音次郎は、我が子を病気で亡くし、自身もひどく体調を崩して、一時、生死の淵をさまようことになる。しかし、その苦境の中にあつて、音次郎の天職に向かって邁進する思いは、暗い夜が明けるかのように、ついに開けていく。

「保育院での仕事こそが自分に与えられた使命ではないか。命あれば、困っている子どもたちを育てること、このことに自分の生涯を捧げたい」と。

この思いが音次郎に生きる希望を与え、病状はみるみる快方に向かつていった。

神奈川に戻った音次郎は、医院での仕事を止めて、鎌倉に「鎌倉保育園」を設立し、困っている子どもたちを受け入れ、育てることに専念するようになった。その音次郎の態度は、園の子どもたちのだような言動も、それが例え世間に迷惑をかけるものであったとしても、

「全て園父たる私の責任です。」「親が子どもを見放すということはありません。」

と、我が子を胸に抱き守る実の親のそれであった。

音次郎は生涯、子どもたちに差しのべたその手を離すことはなく、昭和十五（一九四〇）年に七十七歳で亡くなるまでに、外国人も含め五千五百七十一人の子どものを育てたと言われている。

【奔走】

かけ回ること。

【邁進】

勇み立ってひたすら進むこと。

【専念】

心を一つのこと集中すること。

亡くなる前年、帰郷した音次郎は、郷里の「松」の傍らに歌碑を建てた。

「己れ死なば死骸は松の根にうめよ わがたましひの松のこやしに」

ただ一筋に、どんなときにも、どの子にも分け隔てなく愛を注ぎ、そのぬくもりを伝え続けた人。郷土の偉人、音次郎は、その遺言によって、故郷、四万十市竹島の父母のそばに眠っている。

〔参考文献〕「日誌 佐竹音次郎」吉村良司（昭和五十一年）社会福祉法人 鎌倉保育園



佐竹音次郎——一八六四—一九四〇
（元治元）（昭和十五）

四万十市出身。東京で医者になり、神奈川県鎌倉市で医院を開業する傍ら、児童養護施設を開く。「保育」という言葉を初めて使い、子どもを育てることは国の使命であることを多くの人に広めた。

写真提供 鎌倉保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会

【傍ら】
わき。そば。



『郷土の偉人』を読んで、偉人の
生き方や考え方をまとめてみよう

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

郷土の
10
偉人

田内千鶴子

(大正元年) (昭和四十三年)
一九一二—一九六八



大韓民国（通称「韓国」）で孤児救済のために生涯をかけた女性。韓国の動乱と時代の荒波に翻弄されながら孤児たちを守り抜いた。「韓国孤児の母」と呼ばれる。

写真…社会福祉法人 こころの家族

日本と韓国の愛の懸け橋

日本に一番近い外国は韓国です。でも、これまでの両国の歴史にはいろいろな出来事があった、意見が対立していることもあります。しかし、韓国の木浦市には、三千人もの恵まれない子どもたちを育て上げ、たくさん韓国の人から尊敬され、愛され、慕われている日本人女性があります。高知市若松町出身の田内千鶴子です。

千鶴子は、大正八（一九一九）年、両親に連れられて七歳で木浦に渡り、

【韓国】

大韓民国の略称。

【孤児】

両親を失った子ども。

【救済】

苦しんでいる人を救い、助けること。

【翻弄】

思うままにもてあそぶこと。

二十四歳のとき、恵まれない子どもたちの面倒を見る「木浦共生園」を設立し、運営している尹致浩に出会います。壁もふすまも、電気も水道もない共生園。そこで五十人ほどの子どもたちの世話を懸命にしていました。尹致浩の姿に千鶴子は次第に心をひかれ結婚します。そして「子どもたちを守る」とがわたしたちに与えられた運命」という思いをもって共生園を二人で運営していき、思いました。しかし、二人の生活は大変な苦勞の連続でした。

昭和二十五（一九五〇）年に始まった戦争（朝鮮戦争）の中、尹致浩は食料を探しにでかけたまま、行方不明になってしまいました。帰らぬ夫を待ちながら、千鶴子は「あの人が帰ってくるまで園を守る。」と言い、毎日、リヤカーを引き、食料を探しました。子どもたちのために雨の日も風の日もリヤカーを引く千鶴子の姿は、木浦の人



【尊敬】

その人の人格、業績、行為などを優れたものとして尊び敬うこと。

【ふすま】

部屋のしきりに用いる建具の1つ。

【朝鮮戦争】

大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国との間で、第二次世界大戦後の米国・ソ連の対立を背景として起こった戦争。

【リヤカー】

自転車の後尾に付けたり、人が引いたりしてものを運ぶのに用いる二輪車。

たちの心に刻み込まれました。

しかし、愛する尹致浩が再び姿を見せることはありませんでした。

時を経て、韓国政府は千鶴子に文化勲章を贈りました。日本政府も贈りました。韓国の大統領は「田内千鶴子は私たちの子どもを守ってくれた人類愛の人」という言葉を贈りました。千鶴子は「夫が帰るまでと思って園を守ってきただけ。苦労は子どもたちがしました。」と答えたのでした。

高知市若松町には千鶴子をたたえる「愛のふる里」と刻んだ大きな記念碑が立っています。千鶴子の愛は今なお、日本と韓国を結ぶ心の架け橋として生き続けているのです。

【文化勲章】

学問・芸術など文化の発達にすぐれたてがらがあつた者に与えられる勲章。

【記念碑】

ある物事を記念し、後の時代に伝えるために石に文をきざんで建てたもの。



『郷土の偉人』を読んで、偉人の
生き方や考え方をまとめてみよう

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

郷土の
11
偉人

武士半平太

(文政十二年)
一八二九〜一八六五
(慶応元年)



優れた剣術家。尊王攘夷と挙藩勤王を掲げる土佐勤王党を結成。
京都における尊王攘夷運動の中心的役割を担った。

肖像画…高知県立高知城歴史博物館所蔵

日本の夜明けに命をかけた男

武士半平太は、文政十二（一八二九）年、今の高知市に生まれました。幼い頃から学問と武芸に励み、人格は高潔で誠実。詩歌、絵もたしなむ「文武両道」の人で、剣術は一刀流の免許皆伝を受けるほどの腕前であり、高知城下に剣道場を開いていました。

安政三（一八五六）年、江戸へ行った半平太は、ここで長州の久坂玄瑞や薩摩出身者と交流するうちに同志の結集を考えるようになります。そして、文久元（一八六一）年、「尊王攘夷」を実現するため、「土佐勤王党」を結成

【勤王】

天皇に仕え尽くすこと。

【高潔】

精神がけだかくいさぎよいこと。

【文武両道】

学問と武芸の両方の道で、優れた能力を持っていること。



し、リーダーとして活躍するようになるのです。当時、志を同じくするメンバーには坂本龍馬、中岡慎太郎、吉村虎太郎もいて、半平太を含めた四人は「土佐勤王党四天王」といわれました。

江戸幕府から明治政府へ移ろうとするこの当時、日本の政治体制をどうするか激しい争いが続いていた。大きく分ければ「尊王攘夷」と「公武合体」という考え方です。「尊王攘夷」は「国の指導者を天皇とし、その天皇を中心に政治を行い、外国人を追い払う」という考え方です。「公武合体」は「朝廷と幕府の両者が一致して外敵の難を処理し、同時に幕府の体制の立て直しを図る」という考え方でした。その頃の半平太は藩を挙げて尊王攘夷の方向に向かうよう土佐藩に進言し、公武合体と開国論をとる家老の吉田東洋らと対立をしていました。

【免許皆伝】

師匠から弟子に武芸などの大事な点を教え伝えること。

【久坂玄瑞】

長州藩（今の山口県）の武士。尊王攘夷派。

【吉村虎太郎】

土佐藩の武士。高知県高岡郡津野町出身。尊王攘夷派。

【朝廷】

天皇を中心とした貴族による政治。

【幕府】

將軍を中心とした武士による政治。

【開国論】

外国とのつきあいをすべきであるという主張。

【吉田東洋】

土佐藩の重大な職務についていた政治家。公武合体派。

その後、時勢の移り変わりの中、土佐勤王党は次第に力を失い、公武合体派が主導権をとるようになって、半平太も吉田東洋暗殺の容疑で投獄されてしまうこととなります。

享年三十七歳。半平太の辞世の句は「ふた、ひと返らぬ歳をはかなくも今は惜しまぬ身となりけり」(流れていった歳月ははかないものだけれど、私がか今までやってきたことに悔いはない)というものでした。

半平太は土佐勤王党の志を実現することはできませんでしたが、多くの若者の目を日本の将来へ開かせる役割を果たしました。桂小五郎や久坂玄瑞からは、「人望は西郷、政治は大久保、木戸に匹敵する人材」といわれています。

【投獄】

刑務所・拘留所に入ること。

【享年】

死んだときの年齢。

【辞世】

この世に別れを告げること。

【桂小五郎】

本名は木戸孝允(きどたかよし)。長州藩の武士。尊皇攘夷派。

【人望】

その人に寄せられる尊敬・信頼・期待。

【西郷】

西郷隆盛のこと。薩摩藩の武士。

【大久保】

大久保利通のこと。薩摩藩の武士。

【木戸】

木戸孝允のこと。

【匹敵】

比べたときに同程度であること。



『郷土の偉人』を読んで、偉人の
生き方や考え方をまとめてみよう

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

郷土の
12
偉人

寺田寅彦

(明治十一年)
一八七八—一九三五
(昭和十年)



「天災は忘れたころにやってくる」——日本を代表する物理学者の寺田寅彦の言葉。自然科学と文学を融合させた随筆を数多く残す。夏目漱石との親交が深く、漱石の作品にも登場する。

写真Ⅱ高知県立文学館

人生とその出会い

「天災は忘れたころにやってくる」ということばを残している寺田寅彦は偉大な科学者であり、優れた文学者でした。寅彦とともに夏目漱石に学んだドイツ文学者の小宮豊隆は寅彦について次のように述べています。

「科学者としての寅彦は、事実を尊重し、事実の前にはあくまでも従順の度を失わなかった。実験物理学者として終始したのもここにわけがある。事實は寅彦にとって宝であり、また師であった。」

「文学者としての寅彦の文章は、わかりやすく、はっきりしていておもしろ

【天災】

暴風・地震・落雷・洪水など自然界の変化によって起こる災害。

【夏目漱石】

英文学者・小説家。

【尊重】

大事なものとして重んずること。

【従順】

みがあり、さらに美しく、細やかで綿密であって、優しさの中にも気骨を内に貫いており、独自の世界を形づくっている。漱石以来のすばらしい仕事であった。」

多くの人との出会いが、このような寅彦を作ったのでした。中でも、二人の師との出会いが、寅彦に大きな影響を与えました。

一人は、夏目漱石です。寅彦は明治二十九（一八九六）年、熊本五高（現在の熊本大学）に入学します。そこに夏目漱石が教員として赴任していました。もし、そこで漱石に出会わなかったら、後の寅彦はあり得なかったかもしれせん。寅彦は、夏目漱石から学んだことを次のように述べています。「夏目先生には、色々なことを指導していただいた。俳句の表現方法を習っただけでなく自然の美しさを自分自身の眼で発見することを教わった。また、人間の心の中の真なるものと偽なるものとを見分け、そうして真なるものを愛し、偽なるものを憎むべきことを教えられた。」

当時、漱石が指導した寅彦の句

。。売れ残る ラムネの秋の 夕日哉
。。盗人潜む 二百十日の 縁の下
評・斬新
評・奇抜

順序がくるわず、正しく従うこと。

【師】

先生。

【綿密】

くわしくこまやかなこと。

【気骨】

自分の考えをかたく信じて、たやすく人の考えに従わない心もち。

【貫く】

始めから終わりまでやりぬく。

【影響】

他に作用が及んで、反応・変化があらわれること。

【偽】

いつわり。

【斬新】

趣向のきわだって新しいこと。

【奇抜】

人の意表に出ること。

初汐や 岩間岩間を 訪ねてぞ 評・この句、意味も句調もつたない

寅彦のもう一人の師は、同じく熊本五高の三角術（今の数学）の教員、田丸卓郎です。「田丸先生の教えにより、初めて数学の面白さが分かったような気がする。」と寅彦は言っています。

それまでの寅彦は、一番嫌いな学科が数学でした。しかし、田丸の数学の授業は、これまでのものとまるで違ったものでした。その提示される数学の問題について、寅彦はこうに言っています。

「問題は、別に難しいわけではないが、中学の時のような、ただ公式へ当てはめればすぐできる種類のものではなかった。常に『吟味』が必要な問題であつたので、みんなすっきり面食らってしまった。」

寅彦の探究心に火をつけたこの田丸は、物理も教わりました。寅彦は、父親のすすめもあって工科に入学していたのです



【工科】

工業に関する学科。

が、田丸の物理の名講義を聞き、実験を見ていると、どうしても、物理のほかにやるべきものはないという気になってくるのでした。そうして、反対する父親を説得し、三年生になると同時に工科から理科へ移ったのです。これが寅彦が生涯、物理の道に邁進する分かれ道でした。

寅彦は、田丸のことを次のようにも語っています。

「先生は、だらしのない弟子たちに対して、本当の父親のように愛情と寛容さを持って接し、どこまでも親切で、面倒を見てやることに少しも骨身を惜しまれなかった。自分にはだらしなくて、人には正確を要求する凡人とは全く反対であった。」

そして、田丸卓郎のこの姿は、そのまま寅彦の生き方となったのでした。

日々は、出会いの連続です。どの出会いを大切にするかは、その人の考え方や感じ方によります。寅彦は自分の中にもっている大切なものをよく見つめ、そのうえで他者に学ぶ素直な心や感性を持ち、自分の考えをいっそう広げ深めていったのです。

「失敗なき、成功はない」との名言も残した寅彦は、昭和十（一九三五）年十二月三十一日に、五十八歳で生涯を閉じました。

【寛容】

心が広く、よく人をゆるし受け入れること。

【骨身を惜しまない】

苦勞をいとわない。

郷土の
13
偉人

中岡 慎太郎

(天保九年)
一八三八〜一八六七
(慶応三年)



土佐勤王党に加盟。京、江戸で活躍ののち脱藩。長州へ赴く。坂本龍馬と共に京都で暗殺される。

写真：中岡慎太郎館蔵

郷土の復興に、そして維新に尽力

中岡慎太郎は、安芸郡北川村柏木の庄屋に生まれました。三歳で父から読み書きを、四歳で読書を学び、七歳になると儒教を学びに隣村まで通うほどの学習好きな子どもでした。

十七歳の時、藩校田野学館に入学し、武市半平太（瑞山）に剣道を習います。十九歳で江戸に出た慎太郎でしたが、父の病氣のために北川村に帰ることになります。

そのときのことです。安政の大地震で洪水やコレラが流行り、食べ物もな

【脱藩】

藩のおきてを破つて、藩をぬけ出すこと。

【復興】

一度衰えたものが、再び盛んな状態に戻る。

【維新】

政治の体制が新しくなること。

【尽力】

力を尽くすこと。

く村人たちは、イモやクズの根でやっと生き延びている状況でした。

慎太郎は中岡家の山林や田畑を担保にして、藩から米麦を借り入れ人々に配りましたが、それでも食べ物がありません。「食わな生きていけん。」と慎太郎は藩に迫って、さらに八百両を借り入れました。

そして村の復興のために田や畑を開墾し、飢饉に備えてユズを植えたのです。塩を買わなくてもユズがあれば、魚を食べることができるといいう飢饉対策でした。

その後も慎太郎は、飢饉に苦しむ人々を救済するため、度々、藩とかけあうなど、故郷の村民のために力を尽くします。

二十四歳になった慎太郎は、武市瑞山率いる土佐勤王党に入り、志士として活動を始めます。さらに後には脱藩をして、命がけで坂本龍馬と共に薩長同盟を成功へと導きます。

未来の情勢を鋭く見通し、命がけで行動した慎太郎。

慶応三（一八六七）年十一月十五日、京都の近江屋で龍馬と共に数名の刺客に襲われてしまいます。慎太郎、三十歳の命でした。

【庄屋】

江戸時代の村の長。

【儒教】

孔子が始めた教育と学問。

【藩校】

藩内の武士の子どもを教育するために設けた学校。

【コレラ】

コレラ菌により激しい下痢と吐き気をも引き起こす病気。

【八百両】

江戸時代のお金。今のお金にして約五千二百八十万円（一両は約六、六万円）。

【開墾】

荒地をひらくこと。山野を耕して新たに田畑を開くこと。

【飢饉】

農作物がみのらず、食物が不足して、飢え苦しむこと。

郷土の
14
偉人

明日への希望―ジョン・マン・スピリッツ―

中浜 万次郎
(ジョン万次郎)

江戸時代から明治にかけて、アメリカ合衆国（通称「アメリカ」）と日本で活躍したジョン万次郎こと中浜万次郎は、文政十（一八二七）年に土佐の国中浜の貧しい漁師の次男として生まれました。九歳の時に父親を亡くし、万次郎は、幼い頃から船に乗って働いていました。

天保十二（一八四一）年一月、少年万次郎（十五歳）の乗り込んだカツオ船は、足摺岬沖で嵐に遭い、故障を起こしました。そして、同船は十日間、海の上をただ流れに任せて漂い、やっと南の小さな無人島（今の伊豆諸島の最南端の鳥島）に流れ着きました。それから四か月あまり、万次郎と四人の乗組員は、岩のくぼみにたまった雨水を飲み、島にいるアホウドリを捕らえては食べ、ようやく命をつなぎました。そのような中においても年の若い万次郎は、いつも元気で、仲間のために見張りに立ち、あるいは食料を探しに行きました。

漂流して百四十三日目、いつものように見張りに立った万次郎は、遠くに

黒い船を発見します。万次郎は急いで仲間知らせ、みんな船に向かつてんでに手を振りながら大声で叫びました。それに気づいたアメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号により、万次郎たちは助けられました。この時の捕鯨船の船長ウイリアム・ホイットフィールドとの出会いが、その後の少年万次郎の人生を大きく変えていきます。

ジョン・ハウランド号に乗り込んだ万次郎は、積極的にアメリカ人の生活にとけ込もうと努力をしました。そして、昼間は懸命に働き、また夜には英語を寝るのも忘れ勉強しました。そんな万次郎のかしこさとまじめな働きぶりを見ていた船長は、ある日、彼にアメリカの船員と同じ水夫帽をかぶせ、さらにジョン・ハウランド号の名をとって「ジョン・マン」という愛称をつけたのです。船員の人気者となった彼は、クジラの見張り役も果たすようになりました。

船は、アメリカ本土に帰る途中にハワイに立ち寄りました。そこで、万次郎を除く四人の日本人の乗組員は船を降りたのですが、万次郎はジョン・ハウランド号の船員として残ることを希望しました。仲間と別れることはつらいし、国のこと、中浜の母や兄弟のことを思うと胸が痛みます。しかし、「この広い世界の海をかけめぐって、クジラを捕りたい。船のことや海のことをもっと知りたい。」という大きな夢が、仲間との別れの悲しみやさびしさ

【捕鯨】

クジラをとらえること。

【水夫】

ふなのり。

【愛称】

正式の名称のほか、親愛の気持ちをかめてつけた呼び名。

を乗りこえて、力強い決断をさせたのです。

真面目で勇気があり、働きの万次郎を我が子のように愛した船長は、ふるさとの港（マサチューセッツ州フェアヘブン）に帰ったのち、自分の家に万次郎を引き取ります。こうして万次郎のアメリカ生活が始まったのです。

万次郎は、船長の温かい保護のもと、三年間学校に通い、英語や数学、高度な航海術や測量術を学びました。そして、「いつか、日本へ帰るのだ。」との思いを胸に秘め、勉強や仕事に励みました。

卒業後、万次郎は別の捕鯨船に乗って再び長い航海に出ます。その時、彼はその人柄と腕前を見込まれて一等航海士副船長に選ばれました。

多くの船乗りの仕事などを経て万次郎は、稼いだお金でかつての日本の乗組員仲間四人が暮らすハワイへ行き、日本への帰国の準備をします。一本マストの捕鯨用ボートを買ひ、これに「冒険号」（アドベンチャー号）と名をつけました。

嘉永三（一八五〇）年十二月十七日、万次郎は、帰国を決意した三人の仲間と共にホノルルを出港。無事日本へ着くのですが、幕府の鎖国政策のため、九か月も長崎の奉行所の牢に入れられます。その後、出身地の土佐藩にひきとられ、十一年十か月ぶりで彼は幡多郡の中浜村（今の土佐清水市）の母のもとに、やっと帰ることができたのです。

【航海】

船で海上を行くこと。

【測量】

器械を用い、物の高さ・深さ・長さ・広さ・距離を測り知ること。

【航海士】

船の位置の測定、船をあやつる人の指導などに当たる人。

【幕府】

将軍を中心とした武士による政治。

【鎖国】

国が外国と商業取引することを禁止あるいは極端に制限すること。



中浜 万次郎——一八二七—一八九八
(文政十年) (明治三十一年)

江戸末期、十五歳のときに太平洋に漂流。
アメリカの捕鯨船に救助されたのをきっかけに
アメリカに住み、英語を覚え、世界の
先進的知識を吸収。帰国後、明治維新を中
心に新国家づくりに活躍した。

画像提供 Ⅱ ジョン万次郎直系五代目 中濱京

親や兄弟たちのもとで楽しく暮らしたのもつかの間、すぐに万次郎は藩の学校の教授を命ぜられ、その後、幕府直属の武士となります。それから通訳の仕事をするかたわら、造船・航海・測量・捕鯨などの指導に大活躍する毎日になります。これは、土佐藩の指導者や幕府が、この激しくゆれ動く時代に、西洋事情について広い知識を持った万次郎を必要としたからです。万次郎は後に開成学校（今の東京大学の前身）の先生にもなり、近代日本の礎を築く大きな力となりました。

【参考文献】「ジョン万次郎物語」ウエルカムジョン万の会（二〇〇六年）

株式会社 富山房インターナショナル

【奉行】

武家の職名。行政の仕事をする人の中の責任者。

【牢】

罪を犯した人などを入れておく所。

【教授】

学問や芸術を研究し教える人。

【通訳】

言語が違うために話の通じない人の間に立って、ことばを訳して相手方に伝えること。

【礎】

物事の基礎となるもの。

郷土の
15
偉人

野中兼山

(元和元年)
一六一五—一六六三
(寛文三年)



江戸時代初期の土佐藩家老。農民らを工事に従事させ、物部川の山田堰や仁淀川の八田堰、宿毛の河戸堰など、各地に用水路をつくり、後世の園芸王国の基盤をつくる。

産業基盤をつくった「土木神の化身」

野中兼山は、江戸時代初期に土佐藩二代目藩主山内忠義に仕え、「土木神の化身」と呼ばれた人物です。寛永十三（一六三六）年に奉行となった兼山は、忠義から「藩政改革」を命じられます。「藩政改革」とは、藩を豊かにして、民の暮らしをよくするように変えていくことです。そのため、兼山は、新田開発や港づくり、産業振興など数々の事業に取り組みました。

新しい田畑をつくるためには、田畑を潤すための堰や水路が欠かせません。兼山は、土佐にたくさん堰を作りました。物部川には山田堰、野市上井堰、野市下井堰。吉野川支流には下津野堰、井口堰、ノボリ立堰など八カ

【家老】

江戸時代、大名を助けて藩の政治を行い、武士をまとめる重要な仕事を任された家来。

【従事】

仕事にしたがうこと。

【堰】

川から水を取り入れたり、流れる量を調

所。仁淀川には八田堰、新川堰、鎌田堰。後川にはカイロク堰、麻生堰。

このうちの麻生堰は、四万十川の支流・後川の麻生に分水を目的にして設けた井堰です。堰は長さ百六十メートルで、幅が十一メートル。この堰によつて秋田・安並・佐岡・古津賀の四村を灌漑するため、水車を設置しました。今、中村の観光名所ともなっている安並水車です。

そして堰からは水路を引きました。例えば八田堰から延びる吾南用水は、今では春野を豊かな施設園芸の地に生まれ変わらせ、山田堰などは広大な高知平野を生みました。

兼山が手がけたのは堰や水路ばかりではありません。浦戸湾口防波堤など二十八カ所の堤防や防波堤。また、津呂港（室戸岬漁港）、室津港（室戸港）、手結港、浦戸港（高知港）、柏島港などの港をつくり、船が停泊できるようにしたのです。

高知は今や、野菜や果物の生産が盛んな「園芸王国」となり、漁業や林業も盛んな県となっています。これは、兼山による基盤整備のおかげだとも言えます。

しかし、こうした功績の一方で、兼山に厳しい労働を強いられた人たちがら不満が出されたということも伝えられています。

節したりするためのもの。

【用水路】

堰や川から水を取り、主に農業のために水を流す水路。

【園芸】

草花や野菜、果物などを植えて育てること。

【基盤】

基礎となるもの。

【化身】

生まれ変わり。

【奉行】

武家の職名。行政の仕事をする人の中の責任者。

【灌漑】

田畑に水を引いてそそぎ、土地をうるすこと。

【功績】

成し遂げた優れた働き。

兼山が行った漁業政策に、次のような逸話が残っています。

ある日、江戸にいた兼山から土佐藩に、「はまぐりをたくさんお土産に持って帰る」との手紙が届き、人々は楽しみに浦戸の港に出迎えに行きました。ほどなく、兼山とはまぐりを乗せた船が港に入ってくると、

「兼山、お帰り。帰りを待っていましたよ。」

「はまぐりのお土産をありがとう。」

などと、そこに集まっていた人々は、船上の兼山に向かって呼びかけました。すると兼山は、持って帰ったはまぐりを全て、人々の目の前で海にばらまいてしまったのです。はまぐりが船から陸に引き揚げられるのを心待ちにしていた人々は、

「もったいない!」「どうしてそんなことをするの?!」

と口々に叫びました。その様子を船の上から見た兼山は、からからと笑いながら、「これは、みんなにやるために持って帰ったのではない。こうしておけば、いつでもはまぐりを採って食べることができるじゃないか。また、みんなの子孫も食べることができるし、漁師たちもそれを採って暮らしたしにすることができらるだろう。」

と答えました。その言葉を聞いた人々は、兼山の深い考えに感心したということです。



『郷土の偉人』を読んで、偉人の
生き方や考え方をまとめてみよう

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

植物の不思議にひかれて——牧野富太郎

もし私たちの周りに植物がなかったらどうなると思いますか。どこを見渡しても緑はなく、すごく寂しい光景になります。植物は人間が生きるために必要な酸素を提供してくれるばかりか、心豊かに生活できるやさしい環境を与えてくれるのです。

高知県にその植物のことを日本で一番早く、丁寧に調べ上げた「日本植物分類学の父」と呼ばれる人がいます。高岡郡佐川町生まれの牧野富太郎です。日本にはおよそ七千種の植物がありますが、牧野富太郎はこのうちの千五百種類以上の植物に名前を付けたのです。

これは富太郎が子どもの頃のお話です。

富太郎は、家の裏にある山へ行き、草や木を観察することが大好きでした。（この花は初めて見るぞ。なんという花だろう。）

初めて見る草木に出会うと、富太郎は日が暮れるまで、あきずにずっとそ

の草木をながめているのでした。

ある日のことです。いつものように、富太郎は裏山で草木の観察をしていました。

（あれ、昨日見た草とこの草は、大きさはちがうけれど、何か似ているぞ。）
（この花は、前に見たものに似ているぞ。）

その草の花びらに手をふれたまま、くき、そして地面へと目を移したとき、富太郎はあることに気がつきました。

（そうか、小さな草でも、大きな草でも、みんな同じつくりになっているんだ。
花、くき、葉、根――。今までたくさんの花を見てきたけれど、みんなそうだ。）

このことに気がついた富太郎の心は、大きく高鳴りました。

また、別の日のことです。富太郎は、わくわくしながら、山へ行って草木をながめていました。

すると、今度は不思議なきのこに出合いました。そのきのこはとても大きくて丸い形をしています。富太郎は、いくつかあるきのこの一つを、つつい

【高鳴る】

喜びや期待などで胸がときときする。

てみました。

（あつ。）

なんと、きのこの中から煙が出てきたのです。

富太郎は、びっくりしましたが、きのこをあきることなく、ずっとながめていました。

そして、富太郎は家に帰り、山で見つけた不思議なきのこについて話しました。

「あらまあ、それはキツネノヘダマでしょう。」

お手伝いさんが言いました。

「キツネノヘダマだって。」

「色が白から茶色に変わると、中から煙が出て、空気中に飛び散るんです。それで、キツネノヘダマと言うのですよ。」

（おもしろいきのこだなあ。）

その話を聞いて、富太郎は、大笑いしました。そして、植物や植物の名前に、ますます興味をもつようになりました。

富太郎が本格的に植物の研究にのめり込んだのは二十歳前後の時です。

【興味】

物事にひきつけられること。

富太郎の作った植物標本は大変丁寧に製本され、植物の特徴をよく捉えていました。その上、変色も少なく、標本そのものが一つの美術品であるときえ言われました。そして、明治二十一（一八八二）年には、「日本植物志図篇第一巻第一週」を自画、自筆、自刷、自費と全くの自分の力で出版します。この図は素晴らしく、世界に通用するものでした。

しかし、日本の植物研究のレベルは、まだまだ世界に通用するものではありませんでした。富太郎は、（植物の新種を日本人の手で世界に発表できるようにしなければならぬ）と、植物学についての勉強や挑戦をさらに進めていきます。以後、次第に富太郎の研究は世界でも評価が高まっています。そして、昭和十五（一九四〇）年、植物図鑑としてはこれより優れたものはないと評価される「牧野日本植物図鑑」をまとめるにいたるのです。





牧野富太郎——（文久二年）（昭和三十三年）
一八六二—一九五七

佐川町出身。独学で植物についての研究を深め、『牧野日本植物図鑑』を刊行。「植物図鑑としてこれより優れたものはない」と世界中から高い評価を得、日本植物学の土台を築いた。

写真Ⅱ高知県立牧野植物園所蔵

富太郎は、自分の生き方をまとめた本の中で、自身のことを「植物の精」と言うほどに植物を愛し、植物の勉強を続けた人でした。

昭和三十二（一九五七）年、九十四歳で亡くなるまで、

「人間、死ぬまで勉強です。」

といい続け、植物の観察会や講演会などを通して植物を愛する人を増やし、植物に親しむこと、大切にする考えを多くの人に広めたのでした。その功績が認められ、第一回文化功労者に選ばれています。

草をしとねに 木の根をまくら 花を恋して 五十年

「牧野富太郎自叙伝」より

【精】

不思議な力をもつもの。

【功績】

成し遂げた優れた働き。

【文化功労者】

学問・芸術などの発達のために努力をして立派な仕事をした人。

【しとね】

しきもの。



『郷土の偉人』を読んで、偉人の
生き方や考え方をまとめてみよう

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

記入した日

月

日

年生のとき

郷土の
17
偉人

森田 正馬

(明治七年)
一八七四—一九三八
(昭和十二年)



日本の医学者、精神科神経科医。神経質に対する精神療法である「森田療法」を創始。香南市野市町生まれ。

世界から注目される精神療法考案

病気には、がんなどのように身体がむしばまれてしまうものの他、悩みに
どに気持ちがおおいつくされてしまうものがあります。こうした悩みや不安
といった感情があふれ、身体などが動かなくなる精神の病に対して独自の治
療方法を考えたのが、香美郡富家村兎田（現・香南市野市町）出身の森
田正馬です。

森田は、九歳のころ、お寺に掲げられていた「地獄図」を見て、「死の恐怖」
にとりつかれてしまいます。そして、「自分は大病で死ぬのではないか」と常
に考えている神経質な少年でした。その多感な少年が学業を積み、明治三十

【精神療法】

精神的影響によって
患者を治す方法。

【創始】

物事のはじまり。

【多感】

ちよっとしたことでも感情を動かされやすいこと。

一（一八九八）年、東京帝国大学医科大学に入学し、日本の精神医学界の第一人者になります。

当時、欧米の精神療法の主流は、不安や悩みなどの症状を取り除こうとするものでありました。しかし、森田は「不安や緊張は悪いものではなく、人間が本来持っている自然な感情である」と考え、「不安や緊張を追い出すのではなく、それを自然のものとして受け入れながら、よりよく生きていこう」とする態度を育てる考え方に立ちました。

西洋のフロイトに対して、東洋の森田が考案したこの治療法は、二十世紀初頭、明治から昭和初頭にかけ、「森田療法」と呼ばれ、世界から注目を集めるものとなりました。

人は「緊張しないようにしよう」と考え、緊張感や不安を打ち消そうとしてしまいがちですが、森田療法はその緊張感を無理に打ち消さない態度で臨み、不安や悩みとの共存を目指しました。不安の裏には「生きることへの欲望」があると考え、その欲望に沿うことが不安や症状を小さくしていくと判断したのです。

森田療法は「東洋の文化がはぐくんだ人間の悩みの解決法」という評価がなされ、森田療法の学説は、フロイトの精神分析を主流とする欧米にも大きな影響を与えることとなりました。

【フロイト】

オーストリアの精神医学者。

【東洋】

アジアの国々の総称。

【欲望】

不足・不満を感じて、それを満たそうと強く臨む気持ち。

【欧米】

ヨーロッパとアメリカ。

郷土の
18
偉人

紙づくりの偉人

吉井源太

坂本龍馬や岩崎弥太郎と同じ時代を生きた吉井源太は、一八二六年、吾川郡伊野村（今のいの町）に生まれました。家は、代々、紙すきをしていたので、源太は、小さいころから紙のすき方を習い、十四才になると、自分でも紙をすけるようになりました。

源太が三十三才のころのことです。江戸（今の東京都）に行って、紙の消費量を調べたところ、ずいぶんたくさん紙が使われていることを知りました。「こりゃあ、これからますます紙がいるようになる。けれど、今の道具じゃあ、いっぺんに二まいしか紙がすけん。紙の質を落とさんずつ、今までの二倍、三倍の紙をすけんもんじゃろうか。」

源太は、二まいすきの小さな「すき具」を見ながら考えました。

「そうじゃ。ほんなら、いっぺんにもっとたくさんすける新しいすき具を作ってみるうか。」

「すき具」

「けた」や「す」を組み合わせた紙をすく道具

源太は、すぐに新しいすき具作りに取りかかりました。朝から夕方まで、紙をすき、夜になると、自分の部屋の戸をしめ、研究に熱中しました。何度も何度も図面を書き直し、いろいろな大きさの枠を作っては、その具合を試しました。

「いかん。こんなに道具を大きくゆうしたら、持ちにくくなる。どうしたもんかのう。」

源太は、来る日も来る日もすき具作りに打ちこみ、どんな体かくの人でも持てるよう、持ち手をつける工夫もしました。

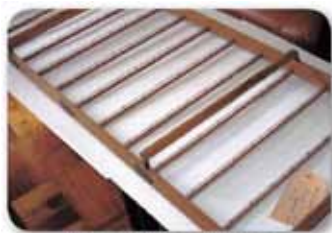
研究は、三年の間、休みなく続けられ、とうとう、

源太は、これまでだれも見なかったことのない大型の「けた」と「す」を完成させました。それが、「土佐の大桁」とよばれるすき具です。

源太の発明によって、一度に、六まいから八まいの紙がすけるようになり、土佐では、紙づくりがますますさかんになりました。

しかし、源太の紙づくりにかける思いは、とどまることはありませんでした。

「この大型のすき具で、もっとうすい紙をすけんもんじゃろうか。うすい紙



源太が改良（かいりよう）した「けた」

やったら軽い、たくさん運ぶのにもいい。けれど、うすうても、すぐやぶれるようじゃいかん。もっとうすうて、強い紙をすいてみたいが。」

源太は、年月をかけ、次々と工夫を重ね、うすい紙を開発していききました。「これは、まっことうすい紙や。」

と、周りの人が言っても、

「まだまだじゃ。工夫しだいでもっとうすい紙ができる。」

と、冬の冷たい水に手を入れて、紙すきを続けました。作業場からは、ザッ、ザッ、ザブンという紙をすく水の音がとだえることはありません。

「ようし、これでどうじゃ！」

源太は、他の地域ですかれていた紙を参考にし、原料のこうどの量を調節したり、すき方を工夫したりして、ついに、厚さ〇・〇三ミリ、紙のうすさの限界をきわめた「土佐典具帖紙」をつくりだしたのです。源太、五十五才のことでした。

この紙のすばらしさは、日本だけでなく、外国にも知られるほどでした。

その後、源太は、インクのにじまない紙や水に強い紙など様々な紙をつくる工夫を続けました。

「一筋に 往くと思えど 朧かな」

【土佐典具帖紙】

別名「かげろうの羽」。世界一うすい、手すきの紙とされ、文化財や美術品の修復などに使われている。



吉井源太

(文政九年) 一八二六—(明治四一年) 一九〇八

「土佐紙業界の恩人」「紙聖」とも称されている。源太の開発した紙は、アメリカの博覧会で受賞し、タイプライター用の複写紙などに使われるようになった。土佐電鉄の路面電車が伊野まで開通したのは、紙を運ぶためであったといわれている。

写真Ⅱ「ふるさとの志」(高知県教育委員会発行)

源太のふるさとの町は、今も紙づくりがさかんで、「紙の町いの町」とよばれています。

(これまで紙づくり一筋にがんばってきたけれど、やりきってはいない。まだまだやりたいことがある。)

これは、源太、六十九才の句とされています。

源太は、八十三年の生涯にわたり、二十八種類の新しい紙せいの品をつくりました。そして、それらは、世界各地の博覧会で、次々と入賞を果たしました。

土佐興具帖紙



発 行 高知県教育委員会(令和6年3月)
編 集 高知県教育委員会事務局小中学校課

〒780-0850

高知市丸ノ内1丁目7番52号

TEL 088-821-4735

FAX 088-821-4926

URL <http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310301/>

